〈研究ノート〉

インドネシアにおける出土銭の調査（2011～2013年）

三　宅　俊　彦

要　約

本研究ノートは、2011年から2013年にかけて行われた、インドネシアのジャワ島およびバリ島での出土銭調査の概要報告である。インドネシアでは12世紀以降近代に至るまで、中国銭を中心とする方孔円銭が流通していた。その実態を把握するため行われた本調査では、12世紀から19世紀までの出土銭を確認することができた。報告は、各調査地点の調査概要の記録と、東部ジャワ発見の２点の中世一括出土銭の詳細、バリ島の寺院出土の近世の賽銭を一括して収集した資料の詳細を記している。

特に13世紀と15世紀に埋められたと考えられる、東部ジャワで発見された一括出土銭は、中国・北宋銭の一文銭を主体としていることが明らかとなり、当該地域の銭貨流通を解明する上で重要な成果を上げた。

またバリ島の寺院発見の賽銭では、中国・清銭を主体としながらもベトナムの私鋳銭や日本の寛永通寶・長崎貿易銭などが発見された。これらは東アジアから東南アジアにかけての地域を越えた銭貨流通の実態を示す貴重な資料である。

キーワード

インドネシア　ジャワ島・バリ島　中国銭　ベトナム銭　日本銭

はじめに

本報告は、インドネシアにおける出土銭調査の概要をまとめたものである。

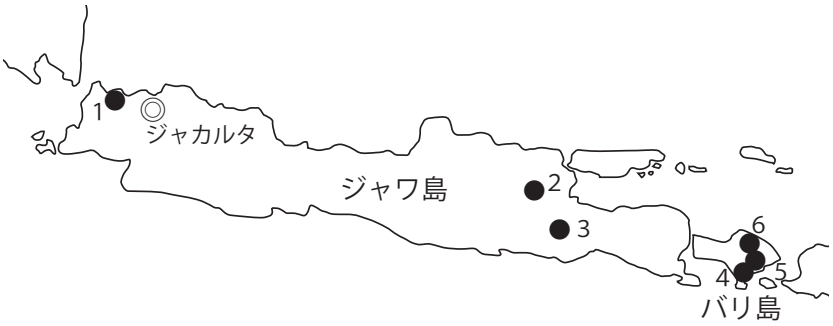
筆者は2011年から2013年にかけて、インドネシアにおいて出土銭調査を行った[註1)]。調査は計３回行われ、ジャワ島およびバリ島にて研究施設や寺院に収蔵されている銭貨資料について、初歩的な調査を実施した。

当初は調査結果を詳細に分析し、研究論文として発表することを考えていたが、研究に取りかかる機会を待つうちに、調査実施からすでに10年近く経ってしまった。このままでは調査で得た資料が埋もれてしまう可能性があり、調査概要だけでも公表しておくべきと考えた。この場を借りて、報告させていただきたい。

1

みやけ　としひこ：淑徳大学　人文学部　教授

今回の報告する遺跡などの場所は図１に、銭貨資料の計測部位については図２に示す。まず第１章にて３回に渡る調査の概要を報告する。続いて第２章と第３章では東部ジャワで発見された一括出土銭の詳細を報告する。また第４章ではバリ島の寺院にて発見された近世の賽銭の一括資料の報告を行う。



1 バンテン・ラマ遺跡　2 トロウラン遺跡　3 マラン県　4 デンパサール
5 ウブド　6 クブサルヤ遺跡

図１　インドネシアにおける出土銭の調査

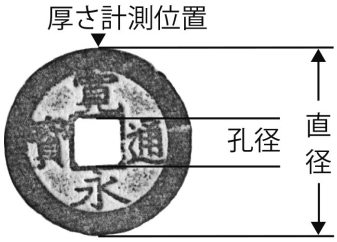


図２　銭貨計測部位

１．調査概要

１）2011年

① 期間・参加者・調査地

期　間：2011年２月２日～２月９日

参加者：三宅俊彦（専修大学兼任講師）、坂井隆（台湾大学）、菊池誠一（昭和女子大学）、ソニー W. ウィヴィソノ（国立考古学研究開発センター）[註2)]

調査地：セラン考古学遺産保存センター、バンテン・ラマ遺跡博物館、バンテン・ラマ考古調査センター事務所、国立博物館、東部ジャワ考古学遺産保存センター、デンパサール考古学センター、バリ考古学遺産保存センター

② 調査の概要

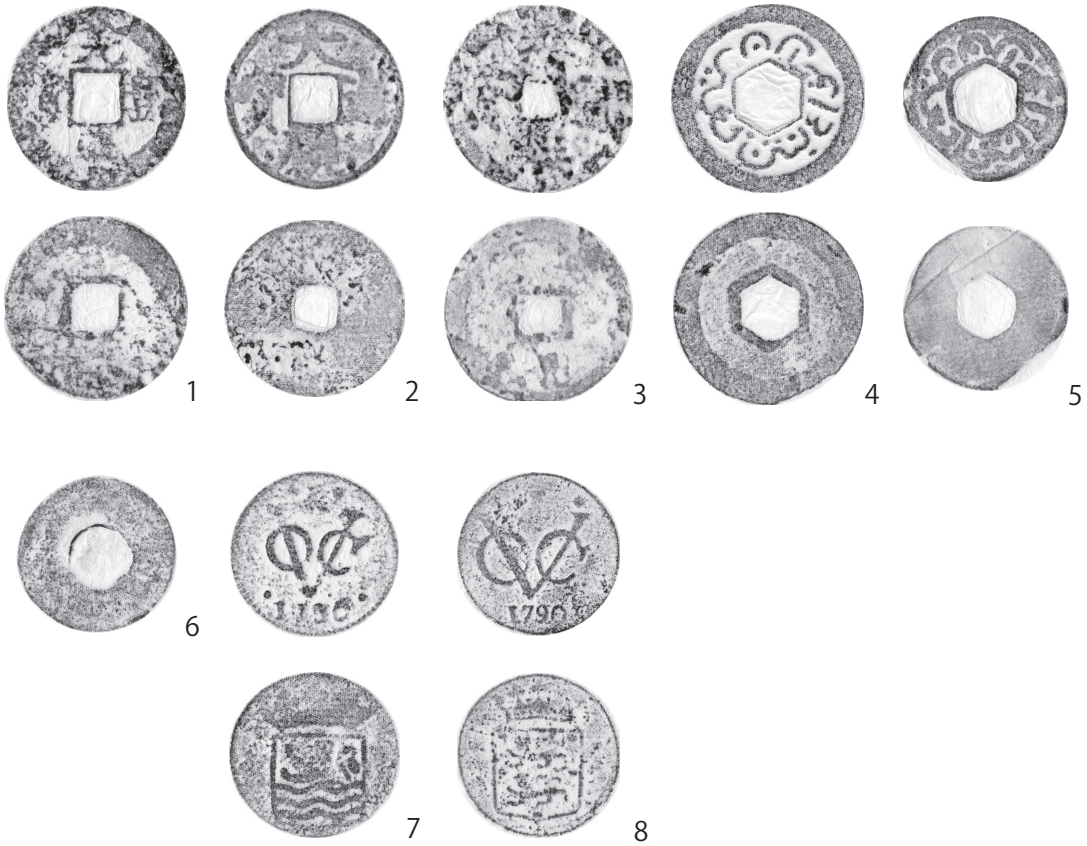
セラン考古学遺産保存センター：

ジャワ島西部にあるバンテン州の州都セラン（図１－１）の遺跡保存センターにて、旧バンテン王国の都であるバンテン・ラマ（Banten Lama）遺跡出土の銭貨を見学した。中国銭の元豐通寶、大観通寶、永樂通寶のほか、バンテン・コイン３枚、東インド会社のコイン２枚を計測、採拓した（表１、図３）。

2

表１　セラン考古学遺産保存センター収蔵銭貨計測表

No.	銭貨銘	初鋳年（時期）	王朝	直径（mm）	孔径（mm）	厚さ（mm）	重さ（g）	図版
1	元豐通寶	1078	北宋	24.7	6.2	1.3	3.0	図3-1
2	大観通寶	1107	北宋	24.2	5.9	0.9	3.1	図3-2
3	永樂通寶	1408	明	25.2	4.6	1.3	4.4	図3-3
4	バンテン・コイン	17世紀	バンテン	25.7	8.5	0.8	2.4	図3-4
5	バンテン・コイン	17世紀	バンテン	22.2	8.6	0.5	2.2	図3-5
6	バンテン・コイン	17世紀	バンテン	20.9	8.0	0.4	1.0	図3-6
7	VOCコイン	1730	VOC	22.3	—	1.0	3.3	図3-7
8	VOCコイン	1790	VOC	21.9	—	1.0	3.2	図3-8



S=1/1。銭貨の詳細については表１「図版」を参照。

図３　セラン考古学遺産保存センター収蔵銭貨

バンテン・ラマ遺跡博物館：

バンテン・ラマ遺跡博物館に収蔵されている中国の銭貨18枚を調査した。ここでは、バンテン・ラマ考古調査センター事務所に所蔵されていた、当遺跡出土の２枚の中国銭（表２－９，17）も合わせ、計20枚を報告する。中国銭の内訳は明の永樂通寶４枚、清の雍正通寶16枚であり、雍正通寶は寶泉局５枚、寶源局２枚、寶雲局６枚、寶浙局２枚、寶黔局１枚を確認した。計測は20枚すべてを、拓本は代表的なもの６枚を採った。（表２、図４）。

バンテン・ラマ考古調査センター事務所：

当調査センター事務所では、収蔵されているグレシク（Gresik）遺跡の出土銭32枚とゴサリ（Gosari）遺跡の出土銭30枚を見学した。計測・採拓はしなかった。銭貨の種類と数量を表３，４に示す。みな中国銭で、唐・開元通寶、北宋銭、明・永樂通寶などが確認できたが、中心となるのは北宋銭であった。

国立博物館：

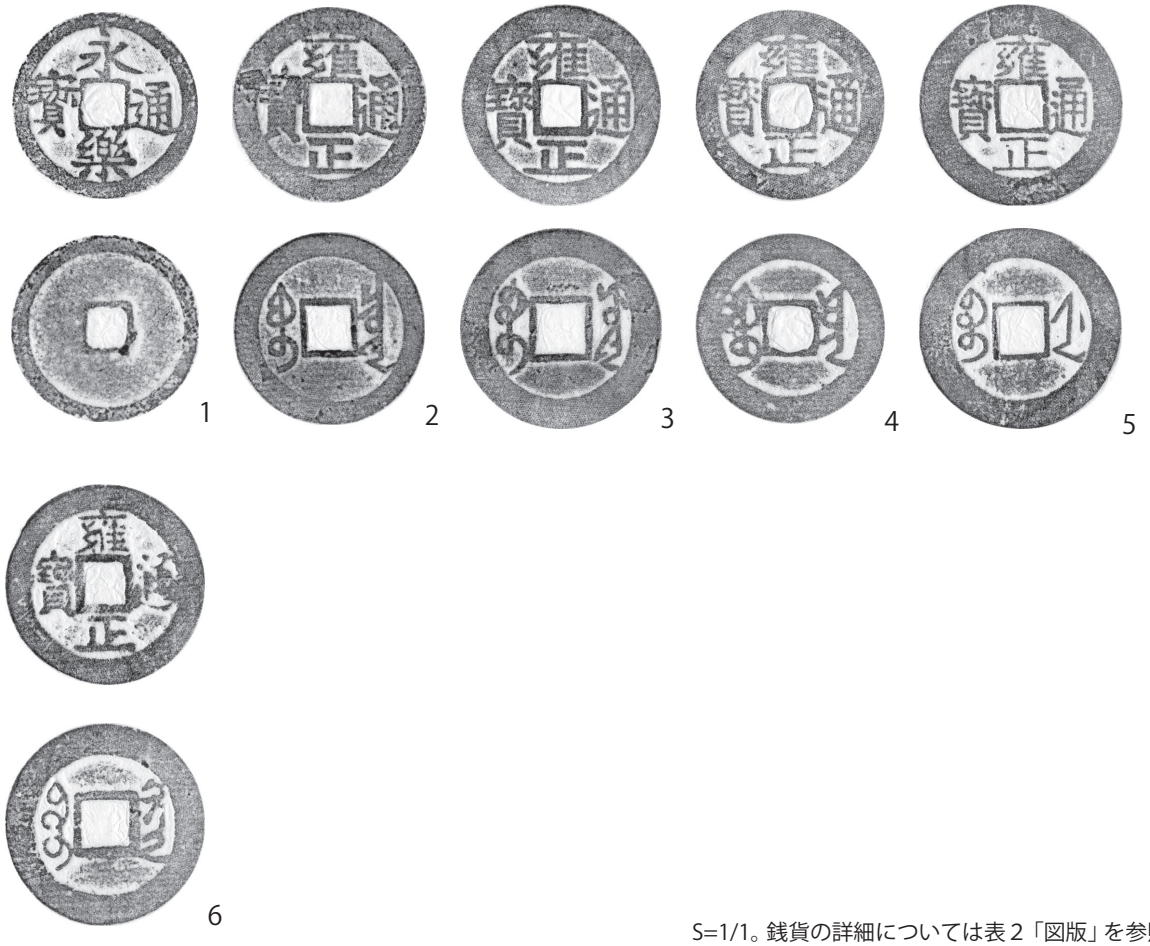
国立博物館では、銭貨を使用して作られた人形と、マラン（Malang）で発見された白磁の壺に入れられた17枚の銭貨を見学した。人形はバリ島のヒンドゥー教の葬儀に際して用いられるもので、中国銭を結び合わせて人の形状に作る。マラン発見の壺に入れられた銭貨は確認できたものはすべて中国銭であり、唐・開元通寶および北宋銭であった。銭貨の種類と数量を表５に示す。

東部ジャワ考古学遺産保存センター：

ジャワ島東部にある東部ジャワ考古学遺産保存センターは、マジャパイト王国の都であるトロウラン遺跡に隣接している（図１－２）。ここではまず、トロウラン遺跡の出土銭を見学した。一括出土銭を含

表２　バンテン・ラマ遺跡博物館収蔵銭貨計測表

No.	銭貨銘	初鋳年	王朝	直径（㎜）	孔径（㎜）	厚さ（㎜）	重さ（g）	備　　考　（図 版）
1	永樂通寶	1408	明	25.2	5.4	0.9	2.8	図4-1
2	永樂通寶	1408	明	24.3	5.1	1.6	5.0	
3	永樂通寶	1408	明	24.7	5.3	1.1	2.8	
4	永樂通寶	1408	明	24.5	5.8	1.2	3.3	
5	雍正通寶	1723	清	25.1	5.6	1.2	4.4	寶泉局
6	雍正通寶	1723	清	26.7	5.3	1.2	4.9	寶泉局、図4-2
7	雍正通寶	1723	清	26.7	5.8	1.1	4.1	寶泉局
8	雍正通寶	1723	清	24.8	5.9	1.0	3.4	寶泉局
9	雍正通寶	1723	清	25.3	5.8	1.1	4.6	寶泉局、バンテン・ラマ考古調査センター事務所所蔵
10	雍正通寶	1723	清	25.6	5.8	1.0	4.4	寶源局
11	雍正通寶	1723	清	27.0	5.7	1.1	4.7	寶源局、図4-3
12	雍正通寶	1723	清	25.7	6.1	0.9	3.2	寶雲局、図4-4
13	雍正通寶	1723	清	27.1	6.0	0.9	3.1	寶雲局
14	雍正通寶	1723	清	27.5	5.5	1.1	4.6	寶雲局
15	雍正通寶	1723	清	27.7	5.9	1.0	4.7	寶雲局
16	雍正通寶	1723	清	27.6	5.6	1.1	5.2	寶雲局
17	雍正通寶	1723	清	25.8	5.3	1.0	4.2	寶雲局、バンテン・ラマ考古調査センター事務所所蔵
18	雍正通寶	1723	清	27.2	5.8	1.0	4.4	寶浙局、図4-5
19	雍正通寶	1723	清	27.0	5.8	0.9	4.1	寶浙局
20	雍正通寶	1723	清	27.1	5.6	1.3	4.4	寶黔局、図4-6



S=1/1。銭貨の詳細については表２「図版」を参照。

図４　バンテン・ラマ遺跡博物館収蔵銭貨

表３　グレシク遺跡出土銭集計表

No.	銭貨銘	数量	初鋳年	王朝	備考
1	開元通寶	1	621	唐	
2	祥符元寶	2	1008	北宋	
3	祥符通寶	1	1008	北宋	
4	天禧通寶	2	1017	北宋	
5	皇宋通寶	6	1039	北宋	
6	熙寧元寶	3	1068	北宋	
7	元豐通寶	2	1078	北宋	
8	元祐通寶	5	1086	北宋	
9	紹聖元寶	2	1094	北宋	
10	元符通寶	1	1098	北宋	
11	政和通寶	1	1111	北宋	
12	景定元寶	1	1263	南宋	背上“四”
13	永樂通寶	5	1408	明	

表４　ゴサリ遺跡出土銭集計表

No.	銭貨銘	数量	初鋳年	王朝
1	開元通寶	2	621	唐
2	宋通元寶	1	960	北宋
3	太平通寶	1	976	北宋
4	淳化元寶	1	990	北宋
5	至道元寶	1	995	北宋
6	咸平元寶	2	998	北宋
7	祥符元寶	1	1008	北宋
8	天聖元寶	2	1023	北宋
9	皇宋通寶	6	1039	北宋
10	熙寧元寶	2	1068	北宋
11	元豐通寶	1	1078	北宋
12	元祐通寶	5	1086	北宋
13	紹聖元寶	2	1094	北宋
14	聖宋元寶	1	1101	北宋
15	政和通寶	2	1111	北宋

表５　マラン出土銭集計表

No.	銭貨銘	数量	初鋳年	王朝
1	開元通寶	3	621	唐
2	皇宋通寶	3	1039	北宋
3	熙寧元寶	3	1068	北宋
4	元豐通寶	1	1078	北宋
5	元祐通寶	1	1086	北宋
6	元符通寶	1	1098	北宋
7	祥符元寶	1	1008	北宋
8	聖宋元寶	2	1101	北宋
9	不明	3		

め、中国銭が大量に出土していることを確認したが、具体的な調査は行っていない。さらに、マラン県（図１－３）ンガバブ（Ngabab）から発見された一括出土銭の調査を行った。この資料の詳細については、第３章で報告する。

デンパサール考古学センター：

バリ島のデンパサール（図１－４）にあるデンパサール考古学センターでは、バリ島内の９カ所の遺跡から出土した260枚の銭貨を見学した。中世から近世の時期のもので、唐から清までの中国の銭貨だけでなく、日本の寛永通寶や長崎貿易銭（元豊通寶）、ベトナムの銭貨などが確認できた。東南アジアの交易ネットワークの広さと、銭貨流通の具体的な状況をうかがうことのできる資料であった。銭貨の種類と数量を表６に示す。

表６　デンパサール考古学センター収蔵銭貨集計表

No.	銭貨銘	鋳造局	初鋳年（時期）	王朝（鋳造場所）	BDA	PSW	BD	AK	TJK	SND	TBG	BLJ	SMN	計
1	開元通寶		621	唐	4									4
2	咸平元寶		998	北宋	2									2
3	景德元寶		1004	北宋	1									1
4	祥符元寶		1008	北宋	2									2
5	祥符通寶		1008	北宋	4				1					5
6	天禧通寶		1017	北宋	3									3
7	天聖元寶		1023	北宋	2					1				3
8	景祐元寶		1034	北宋	3									3
9	皇宋通寶		1039	北宋	4	1								5
10	嘉祐通寶		1056	北宋	1									1
11	熙寧元寶		1068	北宋	5						2			7
12	元豐通寶		1078	北宋	5									5
13	元祐通寶		1086	北宋	3			2		1				6
14	紹聖元寶		1094	北宋	4									4
15	元符通寶		1098	北宋	2									2
16	聖宋元寶		1101	北宋	4					1			1	6
17	大観通寶		1107	北宋								1		1
18	政和通寶		1111	北宋	2									2
19	淳熙元寶		1174	北宋	2									2
20	洪武通寶		1368	明	4									4
21	永樂通寶		1408	明	1		1							2
22	弘治通寶		1503	明	2									2

No.	銭貨銘	鋳造局	初鋳年（時期）	王朝（鋳造場所）	BDA	PSW	BD	AK	TJK	SND	TBG	BLJ	SMN	計
23	萬曆通寶		1576	明	2									2
24	崇禎通寶		1628	明	1									1
25	昭武通寶		1678	呉三桂	1									1
26	洪化通寶		1679	呉世璠	1									1
27	順治通寶	寶泉局	1644	清	2									2
28	順治通寶	寶源局	1644	清	1									1
29	康熙通寶	寶泉局	1662	清	3			1			1			5
30	康熙通寶	寶源局	1662	清	3									3
31	康熙通寶	寶東局	1662	清	2									2
32	康熙通寶	寶浙局	1662	清	1									1
33	康熙通寶	寶廣局	1662	清	1									1
34	康熙通寶	不明	1662	清	2			1						3
35	雍正通寶	寶泉局	1723	清	4									4
36	雍正通寶	寶源局	1723	清	1									1
37	乾隆通寶	寶泉局	1736	清	4	3	2	8						17
38	乾隆通寶	寶源局	1736	清	3	1		3			1			8
39	乾隆通寶	寶直局	1736	清				1						1
40	乾隆通寶	寶浙局	1736	清	1									1
41	乾隆通寶	寶福局	1736	清	1									1
42	乾隆通寶	寶黔局	1736	清		1								1
43	乾隆通寶	寶雲局	1736	清	1	1		4						6
44	乾隆通寶	不明	1736	清	1	1		3	3					8
45	嘉慶通寶	寶泉局	1796	清				1						1
46	嘉慶通寶	寶源局	1796	清		2								2
47	嘉慶通寶	寶武局	1796	清		1		1						2
48	嘉慶通寶	寶雲局	1796	清		1	1	2						4
49	嘉慶通寶	寶鞏局	1796	清			1							1
50	嘉慶通寶	不明	1796	清		2								2
51	道光通寶	寶泉局	1821	清	1	1	1	1						4
52	道光通寶	寶鞏局	1821	清			1	1						2
53	道光通寶	寶雲局	1821	清				2						2
54	道光通寶	不明	1821	清			1							1
55	咸豐通寶	寶泉局	1851	清			1							1
56	光緒通寶	寶鞏局	1875	清	2		1	2				1		6
57	大定通寶		1140	ベトナム	2									2
58	元豐通寶		1225	ベトナム	3									3
59	熙元通寶		1379?	ベトナム	4		1							5
60	大和通寶		1443	ベトナム	1									1
61	大和通寶		私鋳銭	ベトナム	1									1
62	景興通寶		1740	ベトナム	5									5
63	景興巨寶		1762	ベトナム	2									2
64	安法元寶		18c?	ベトナム	13					1				14
65	紹豐平寶		18c?	ベトナム	5				1					6
66	治平聖寶		18c?	ベトナム	3									3
67	聖元通寶		18c?	ベトナム	8									8
68	祥元通寶		18c?	ベトナム	1									1
69	元祐通寶		18c?	ベトナム	2									2
70	咸平元寶		18c?	ベトナム	3									3
71	太平聖寶		18c?	ベトナム	2									2
72	天聖元寶		18c?	ベトナム	1									1
73	紹聖平寶		18c?	ベトナム	1									1
74	元符通寶		18c?	ベトナム	1									1
75	寛永通寶		1636	日本	2									2
76	元豊通寶		1660	日本	3									3
77	寛永通寶		1697	日本	8		1							9
78	不明				2	7	2		3					14
計					172	22	14	33	8	4	4	2	1	260

遺跡名：BDA: Badudawa, PSW: Puseh Wasan, BD: Bukit Darma, AK: Alas Kedaton, TJK: Tejakula, SND: Sanding, TBG: Tamblinga, BLJ: Belanjong, SMN: Semawang

バリ考古学遺産保存センター：

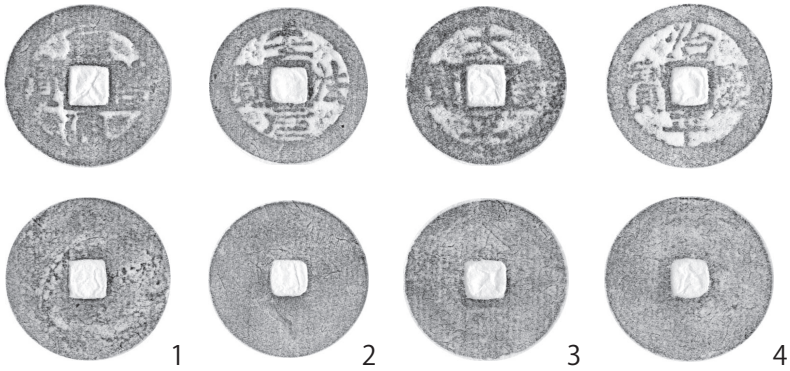
バリ島のウブド（図１−５）にあるバリ考古学遺産保存センターでは、マルガ・テンガ（Marga Tengah）遺跡から出土した銭貨10枚と、バリ島各地で収集された銭貨159枚を見学した。マルガ・テンガ遺跡の銭貨は清の銭貨が主体で、北宋・熙寧元寶と明・萬曆通寶がそれぞれ１枚含まれていた（表７）。またバリ島各地で収集された銭貨は、清の乾隆通寶が116枚確認されたほか、ベトナムで鋳造された私鋳銭と考えられるものが25枚、日本の寛永通寶と長崎貿易銭（元豊通寶）18枚がみられた。収集した銭貨の集計表（表８）とベトナムの私鋳銭の拓本を示す（図５）。

表７　マルガ・テンガ遺跡出土銭貨集計表

No.	銭貨銘	鋳造局	初鋳年	王朝	数量
1	熙寧元寶		1068	北宋	1
2	萬曆通寶		1756	明	1
3	乾隆通寶	寶泉局	1736	清	2
4	乾隆通寶	寶源局	1736	清	1
5	乾隆通寶	不明	1736	清	2
6	嘉慶通寶	不明	1796	清	1
7	道光通寶	寶川局	1821	清	1
8	咸豊通寶	不明	1851	清	1
計					10

表８　バリ島収集銭貨集計表

No.	銭貨銘	鋳造局	初鋳年（時期）	王朝（鋳造場所）	数量	備考（図版）
1	乾隆通寶	寶泉局	1736	清	49	
2	乾隆通寶	寶源局	1736	清	16	
3	乾隆通寶	寶直局	1736	清	2	
4	乾隆通寶	寶晋局	1736	清	1	
5	乾隆通寶	寶蘇局	1736	清	2	
6	乾隆通寶	寶浙局	1736	清	3	
7	乾隆通寶	寶昌局	1736	清	1	
8	乾隆通寶	寶武局	1736	清	5	
9	乾隆通寶	寶川局	1736	清	5	
10	乾隆通寶	寶黔局	1736	清	2	
11	乾隆通寶	寶雲局	1736	清	12	
12	乾隆通寶	寶桂局	1736	清	1	
13	乾隆通寶	不明	1736	清	17	
14	元豊通寶		18C?	ベトナム私鋳銭	4	図5-1
15	安法元寶		18C?	ベトナム私鋳銭	6	図5-2
16	聖元通寶		18C?	ベトナム私鋳銭	4	
17	太平聖寶		18C?	ベトナム私鋳銭	4	図5-3
18	治平聖寶		18C?	ベトナム私鋳銭	1	図5-4
19	祥符元寶		18C?	ベトナム私鋳銭	1	
20	天聖元寶		18C?	ベトナム私鋳銭	1	
21	天宋元寶		18C?	ベトナム私鋳銭	1	
22	不明（ベトナム銭）		18C?	ベトナム私鋳銭	3	
23	寛永通寶		1636	日本	1	古寛永
24	元豊通寶		1660	日本	1	長崎貿易銭
25	寛永通寶		1668	日本	3	背“文”
26	寛永通寶		1697	日本	13	新寛永



S=1/1。銭貨の詳細については表８「図版」を参照。

図５　バリ島収集のベトナム私鋳銭

7

2）2012年

① 期間・参加者・調査地

期　間：2012年1月31日～2月8日

参加者：三宅俊彦、坂井隆、菊池誠一、西川和孝（国士舘大学非常勤講師）、古賀康士（九州大学総合研究博物館専門研究員）、ソニー W. ウィヴィソノ、I. G. M. スアルバワー（デンパサール考古学センター）

調査地：クブサルヤ村（バリ島）

② 調査の概要

バンリ県バトゥール山の外輪山に位置するクブサルヤ村（図1－6）の寺院を改修中に発見された銭貨約5,000枚を調査した。本来は1万枚以上発見されたと言われている。出土した銭貨は中国の銭貨が主体となっており、清の銭貨が多いほか、唐・開元通寶、北宋の銭貨、明の銭貨などがあった。その他ベトナムで鋳造された銭貨や日本の銭貨、現地で中国銭を模したものなど、多彩な組成であった。この出土銭については、第4章で詳しく報告する。

3）2013年

① 期間・参加者・調査地

期　間：2013年1月26日～2月1日

参加者：三宅俊彦、坂井隆、西川和孝、菊池（阿部）百里子（昭和女子大学国際文化研究所客員研究員）、岸本泰緒子（駒澤大学人文科学研究科歴史学専攻博士課程）、ソニー W. ウィヴィソノ、ダナン W. ウトモ（東部ジャワ考古学遺産保存センター）

調査地：東部ジャワ考古学遺産保存センター

② 調査の概要

ジャワ島東部にある東部ジャワ考古学遺産保存センターにて2点の一括出土銭の調査を行った。どちらもマラン県（図1－3）より発見されたもので、ンガバブから約1,000枚、プジョンから約5,000枚が出土している。これらの一括出土銭はどちらも中国銭のみで構成されており、プジョンの最新銭が南宋・咸淳元寶、ンガバブの最新銭が明・永樂通寶であった。13世紀から15世紀のジャワ島において、中国の銭貨が流通していたことを示す貴重な資料である。これらの資料の詳細については、第2，3章で報告したい。

8

2．プジョン一括出土銭

1）概要

2011年9月27日にマラン県プジョン郡プジョン村で、丘陵斜面を削平した畑の端の土中より発見された。地元での聞きとり調査では、容器は伴わなかったという。また、とぐろを巻いたような形で発見されたといい、緡に通した状態で埋められたものと考えられる。

銭貨は東部ジャワ考古学遺産保存センターが受け入れた時点で総計4,933枚であった。すべて中国銭で、新、唐、前蜀、南唐、北宋、南宋、金の銭貨が確認された。最も古いものは新・貨泉（14年初鋳）、最も新しいものは南宋・咸淳元寶（背「八」、1272年鋳造）であった（表9）。

表９　プジョン一括出土銭集計表

No.	銭貨銘	数量	初鋳年（時期）	王朝	備考	図版
1	貨泉	1	14	新		図6-1
2	中国古代の銭貨	1	南北朝ころ？	不明		図6-2
3	開元通寶	468	621	唐		図6-3
4	乾元重寶	30	758	唐		図6-4
5	開元通寶（会昌）	2	845	唐	背“京”,“月”	図6-5,6
	開元通寶（会昌）	1	845	唐	背“昌”	図6-7
	開元通寶（会昌）	1	845	唐	背“潤”	図6-8
	開元通寶（会昌）	3	845	唐	背“洛”	図6-9
	開元通寶（会昌）	1	845	唐	背“潭”	図6-10
6	天漢元寶	1	917	前蜀		図6-11
7	唐國通寶	4	958	南唐		図6-12
8	開元通寶（南唐）	1	958	南唐		図6-13
9	宋通元寶	18	960	北宋		図6-14
10	太平通寶	52	976	北宋		図6-15
11	淳化元寶	53	990	北宋		図6-16
12	至道元寶	90	995	北宋		図6-17
13	咸平元寶	83	998	北宋		図6-18
14	景德元寶	124	1004	北宋		図6-19
15	祥符元寶	143	1008	北宋		図6-20
16	祥符通寶	63	1008	北宋		図7-21
17	天禧通寶	112	1017	北宋		図7-22
18	天聖元寶	235	1023	北宋		図7-23,24
19	明道元寶	25	1032	北宋		図7-25
20	景祐元寶	94	1034	北宋		図7-26～28
21	皇宋通寶	603	1039	北宋		図7-29,30
22	至和元寶	57	1054	北宋		図7-31
23	至和通寶	17	1054	北宋		図7-32
24	嘉祐元寶	49	1056	北宋		図7-33,34
25	嘉祐通寶	98	1056	北宋		図7-35
26	治平元寶	96	1064	北宋		図7-36,37
27	治平通寶	90	1064	北宋		図7-38
28	熙寧元寶	462	1068	北宋		図7-39
29	元豐通寶	590	1078	北宋		図7-40
30	元祐通寶	413	1086	北宋		図8-41
31	紹聖元寶	173	1094	北宋		図8-42
32	元符通寶	70	1098	北宋		図8-43
33	聖宋元寶	200	1101	北宋		図8-44
34	大観通寶	67	1107	北宋		図8-45
35	政和通寶	193	1111	北宋		図8-46
36	宣和通寶	23	1119	北宋		図8-47
37	建炎通寶	3	1127	南宋		図8-48
38	紹興通寶（折二）	1	1131	南宋		図8-49
39	正隆元寶	3	1156	金		図11-108
40	淳熙元寶	1	1174	南宋	背“元”	図8-50
	淳熙元寶	1	1180	南宋	背“柒”	図8-51
	淳熙元寶	2	1184	南宋	背“十一”	図8-52
	淳熙元寶	2	1183	南宋	背“十二”	図8-53
	淳熙元寶	1	1188	南宋	背“十五”	図8-54
	淳熙元寶	3	1174	南宋	背“月”	図8-55
	淳熙元寶	4	1174	南宋	背“月”,“星”	図8-56
	淳熙元寶	1	1174	南宋	背面不明	

9

No.	銭貨銘	数量	初鋳年（時期）	王朝	備考	図版
41	紹熙元寶	2	1190	南宋	背“元”	図8-57
	紹熙元寶	2	1193	南宋	背“四”	図8-58
42	慶元通寶	1	1196	南宋	背“二”	図8-59
	慶元通寶	1	1197	南宋	背“三”	図9-60
	慶元通寶	2	1198	南宋	背“四”	図9-61
	慶元通寶	3	1199	南宋	背“五”	図9-62
	慶元通寶	3	1200	南宋	背“六”	図9-63
43	嘉泰通寶	3	1202	南宋	背“三”	図9-64
	嘉泰通寶	1	1203	南宋	背“四”	図9-65
44	開禧通寶	3	1206	南宋	背“二”	図9-66
	開禧通寶	2	1207	南宋	背“三”	図9-67
45	嘉定通寶	3	1208	南宋	背“元”	図9-68
	嘉定通寶	3	1209	南宋	背“二”	図9-69
	嘉定通寶	1	1210	南宋	背“三”	図9-70
	嘉定通寶	1	1211	南宋	背“四”	図9-71
	嘉定通寶	2	1212	南宋	背“五”	図9-72,73
	嘉定通寶	1	1214	南宋	背“七”	図9-74
	嘉定通寶	2	1215	南宋	背“八”	図9-75
	嘉定通寶	1	1216	南宋	背“九”	図9-76
	嘉定通寶	1	1217	南宋	背“十”	図9-77
	嘉定通寶	2	1218	南宋	背“十一”	図9-78
	嘉定通寶	3	1219	南宋	背“十二”	図9-79
	嘉定通寶	1	1220	南宋	背“十三”	図10-80
	嘉定通寶	1	1221	南宋	背“十四”	図10-81
46	紹定通寶	4	1231	南宋	背“四”	図10-82
	紹定通寶	4	1233	南宋	背“六”	図10-83
47	嘉熙通寶	2	1237	南宋	背“元”	図10-84
	嘉熙通寶	1	1237	南宋	背“二”	図10-85
	嘉熙通寶	1	1237	南宋	背“三”	図10-86
	嘉熙通寶	2	1237	南宋	背“四”	図10-87,88
48	淳祐元寶	2	1242	南宋	背“二”	図10-89
	淳祐元寶	1	1244	南宋	背“四”	図10-90
	淳祐元寶	1	1246	南宋	背“六”	図10-91
	淳祐元寶	1	1249	南宋	背“八”	図10-92
	淳祐元寶	1	1250	南宋	背“十”	図10-93
	淳祐元寶	1	1252	南宋	背“十二”	図10-94
49	淳祐元寶（折二）	3	1243	南宋	背“三”	図10-95
50	皇宋元寶	2	1255	南宋	背“三”	図10-96
	皇宋元寶	1	1256	南宋	背“四”	図10-97
	皇宋元寶	1	1258	南宋	背“六”	図10-98
51	開慶通寶	1	1259	南宋	背“元”	図11-99
52	景定元寶	3	1262	南宋	背“三”	図11-100
	景定元寶	1	1263	南宋	背“四”	図11-101
53	咸淳元寶	2	1265	南宋	背“元”	図11-102
	咸淳元寶	1	1268	南宋	背“四”	図11-103
	咸淳元寶	1	1269	南宋	背“五”	図11-104
	咸淳元寶	2	1270	南宋	背“六”	図11-105
	咸淳元寶	3	1272	南宋	背“八”	図11-106,107
54	削られた銭貨	3				図11-109
55	不明	14				
合　計		4933				

２）銭種組成

① 唐以前

唐以前の銭貨は２枚確認した。新・貨泉１枚と、銭名は不明ながら唐以前に鋳造されたと考えられる銭貨１枚である。貨泉はこの一括出土銭の最古銭である（図６－１）。不明銭は、銭銘の状態が悪く判読できなかったが、形状などから唐以前、おそらく南北朝ころの銭貨の可能性が高いと考えている（図６－２）。

② 唐～五代十国

唐の銭貨は506枚あった。開元通寶468枚（図６－３）、乾元重寶30枚（図６－４）、会昌５年（845年）以降に作られたいわゆる「会昌開元通寶」８枚であった。開元通寶がもっとも多く、全体の9.5％を占める。また会昌開元通寶は、背面に鋳造地が漢字で記されており、「京」２枚、「昌」１枚、「潤」１枚、「洛」３枚、「潭」１枚を確認した（図６－５～10）。

五代十国の銭貨は６枚あった。前蜀・天漢元寶１枚（図6-11）、南唐・唐國通寶４枚（図6-12）、南唐・開元通寶１枚（図6-13）を確認した。

③ 北宋・南宋

北宋銭はこの一括出土銭の主体をなしている。北宋銭は28種類確認され、合計4,293枚、全体の87.0％を占める。もっとも多い銭貨は皇宋通寶608枚であり、元豐通寶590枚、熙寧元寶462枚、元祐通寶413枚などがこれに続く（図６-14～20、図７、図８-41～47）。

南宋銭は15種類、合計106枚を確認した。南宋の銭貨には背面に鋳造年を漢数字で記したものが多い（図８-48～59、図９、図10、図11-99～107）。詳細は表９に示す。また一文銭よりも大型で、２枚分の価値を付与された「折二銭（せつじせん）」が少数ながら含まれており、紹興通寶１枚（図８-49）、淳祐元寶３枚（図10-95）の、計４枚を確認した。

④ その他

その他の銭貨として、金・正隆元寶３枚を確認した（図11-108）。

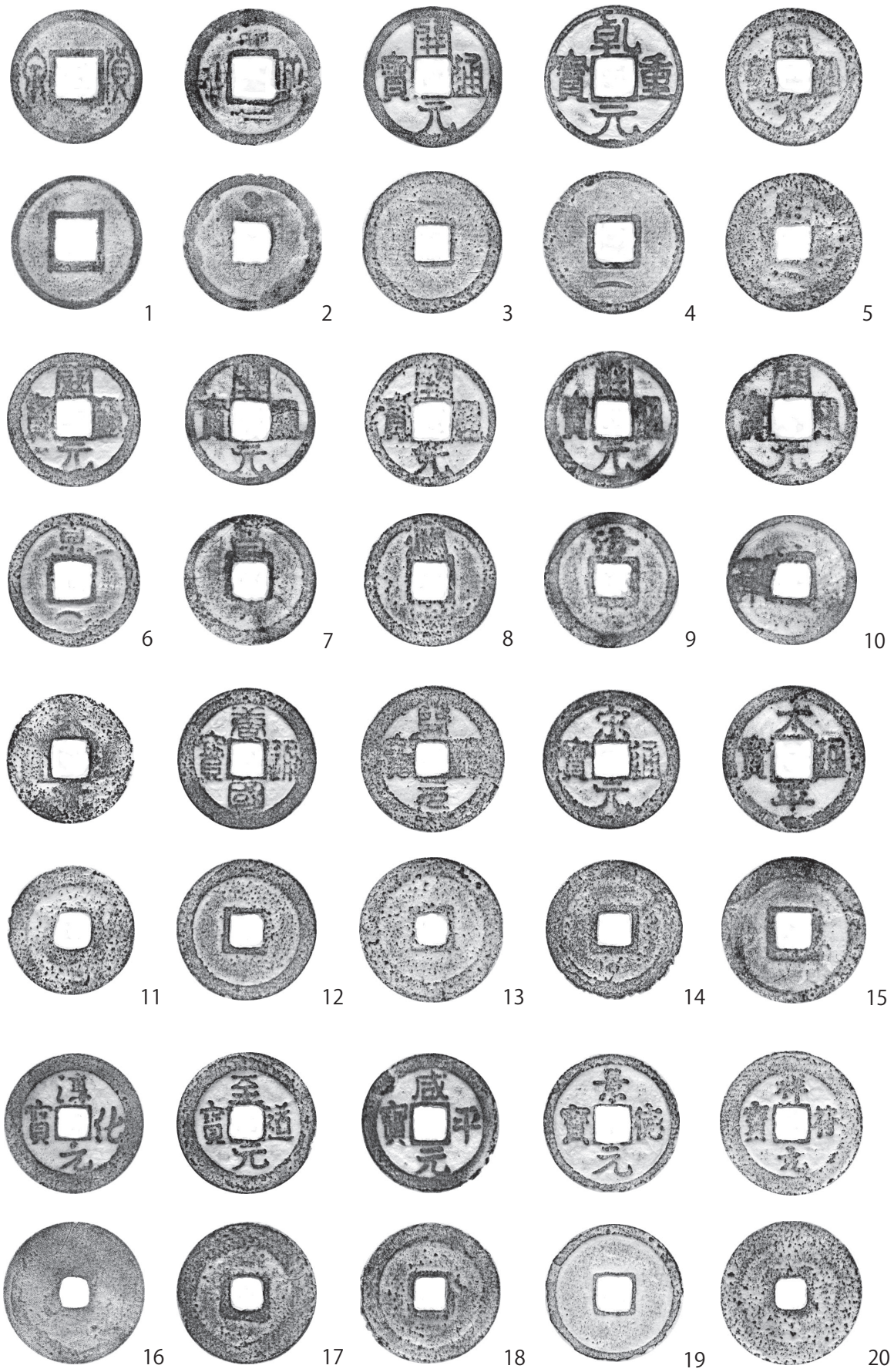
また銭貨銘のある表面を故意に削り取った銭貨も３枚あった。これは、私鋳銭の母銭を製作する途中のものではないかと推測される（図11-109）。

その他、状態が悪く銭種を特定できなかったものが14枚あった。

３）所見

プジョン一括出土銭の最新銭は南宋・咸淳元寶（背「八」）で、1272年鋳造である。最新銭は埋められた時期を推測する際の、重要な手がかりとなる。1272年は南宋末期に相当し、1276年には首都である臨安がモンゴルによって落とされ、南宋は事実上滅亡する。こうした背景を考えると、中国の銭貨は南宋の末ないしは元の初めころに埋められた可能性が高い。

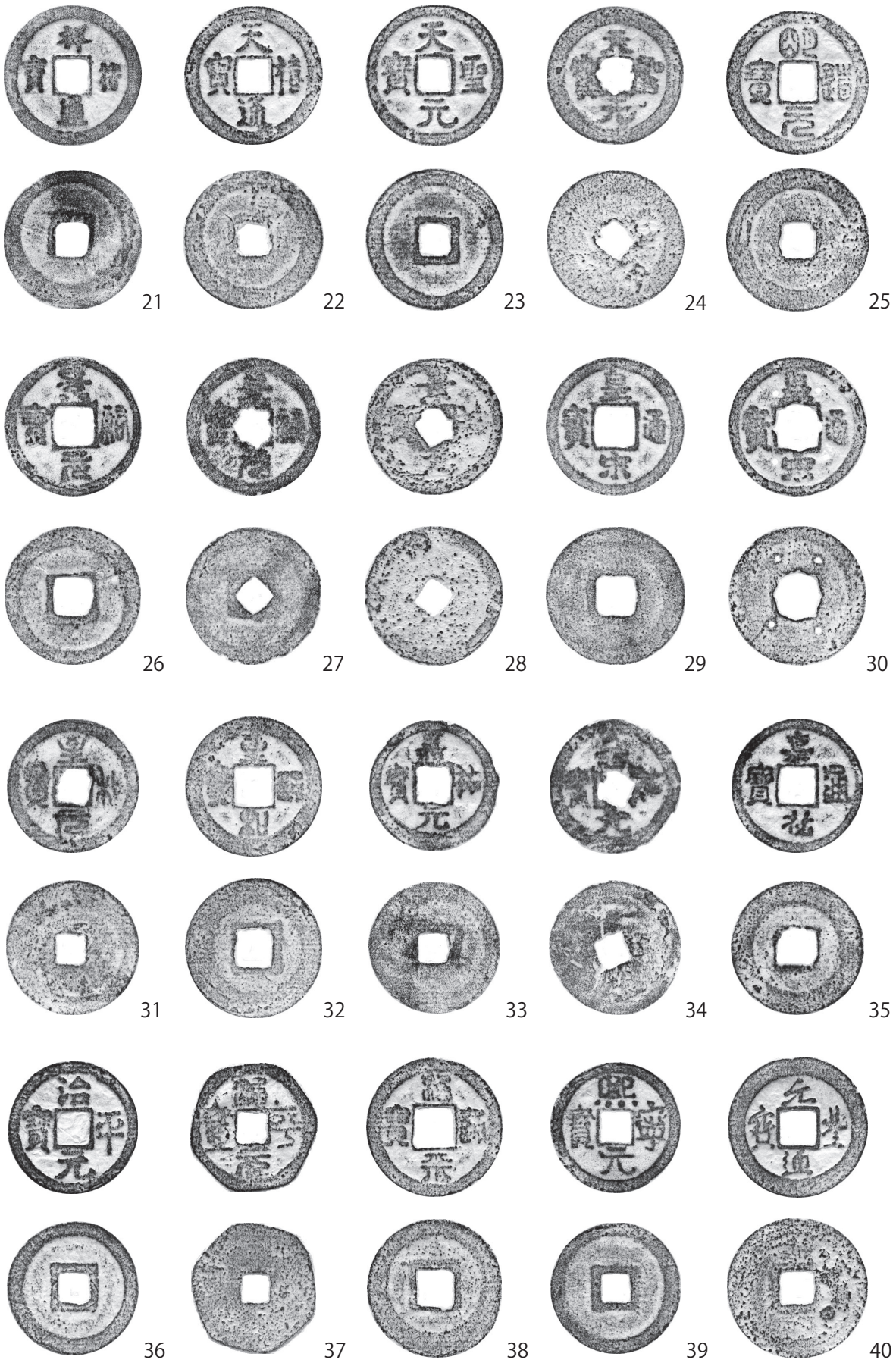
ジャワでは12世紀のクディリ王国のときにはすでに海外交易が盛んであり、香木や胡椒などを中国へ輸出し、中国銭を輸入していたという[1)]。ジャワではクディリ王国以降、中国銭の流通が増大し、貨幣経済が進捗するようになったとされ、この状況はマジャパヒト王国にも引き継がれる。元・至正年間（1341-1370年）のジャワの様子を記述した汪大淵『島夷誌略』には、「銅銭を用いるが、一般には、銀、錫、鍮、銅を混ぜて鋳造した、巻貝大のものを銀銭と名づけて、銅銭を計量するのに使用している」という記述がみられることから[2)]、銅銭がこの時期のジャワにおいて広く使われていたことが分かる。



12

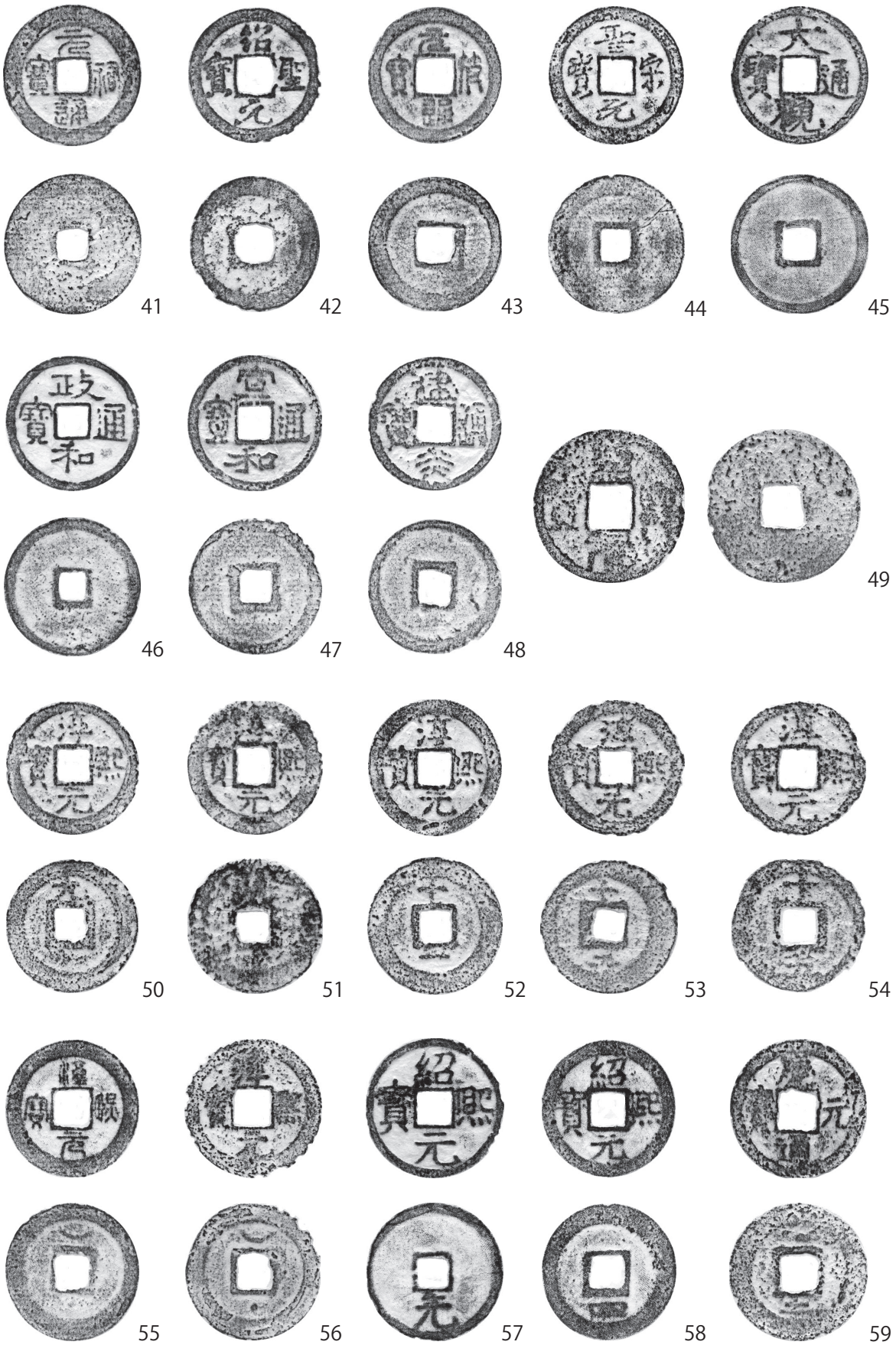
S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

図６　プジョン一括出土銭（１）



S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

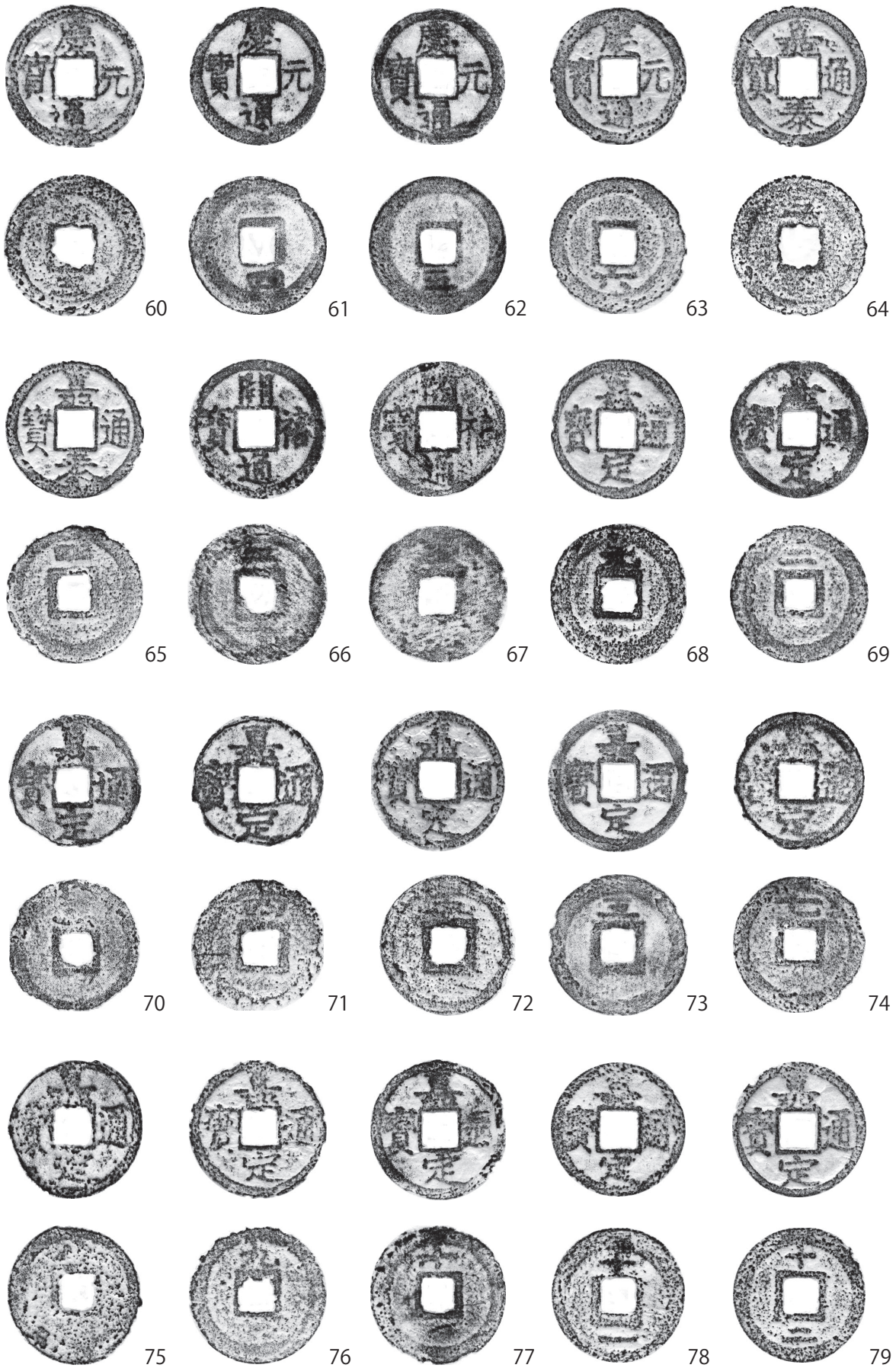
図７　プジョン一括出土銭（２）



14

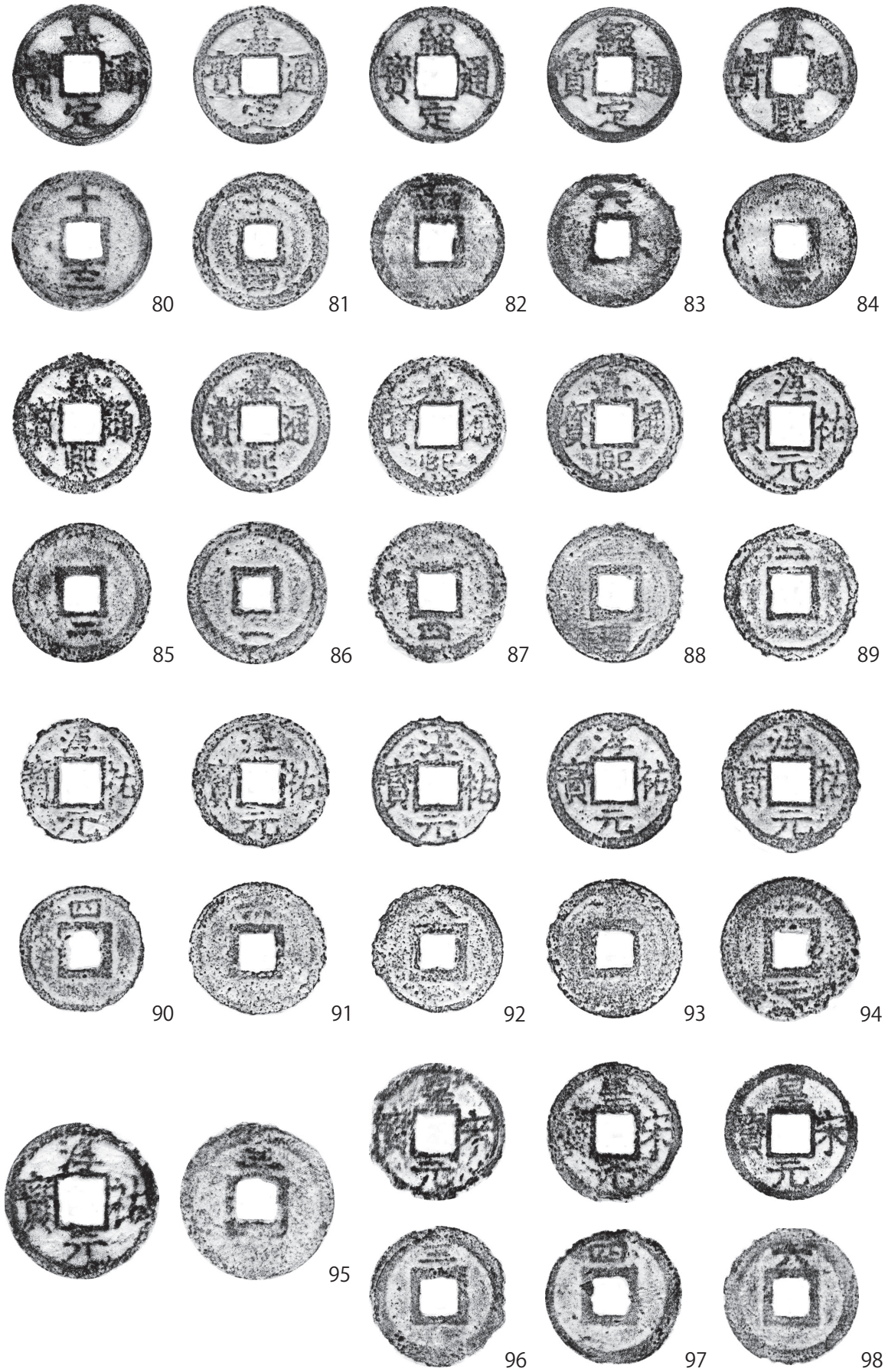
S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

図８　プジョン一括出土銭（３）



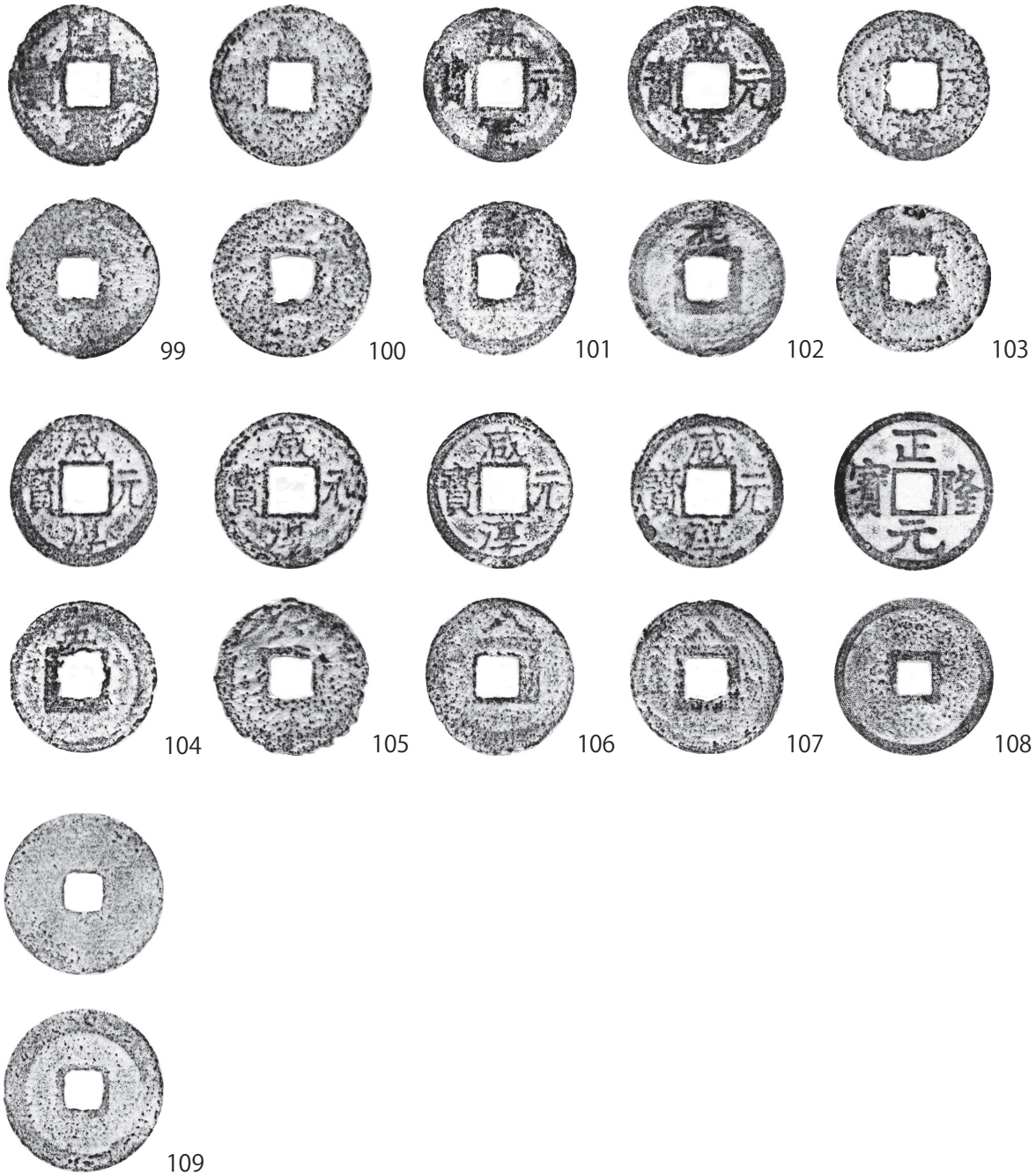
S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

図９　プジョン一括出土銭（４）



S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

図10　プジョン一括出土銭（５）



S=1/1。銭貨の詳細については表９「図版」を参照。

図11　プジョン一括出土銭（６）

プジョン一括出土銭はこうした時期の、ジャワ東部における中国銭の流通状況を反映していると考えられる。

また銭貨の種類について注目される点は、一文銭を主体としていることであろう。大型の中国銭である「大銭」は折二銭４枚のみであり、その他はすべて一文銭であった。中国の一括出土銭では一定量の大銭が含まれていることから、ジャワにおいては中国銭を一文銭のみ選択し使用していたことをうかがわせる[3)]。

3．ンガバブ一括出土銭

1）概要

マラン県プジョン郡ンガバブ村にて耕作中に発見された。詳細は不明であるが、一括出土銭とみて間違いない。2009年12月10日に東部ジャワ考古学遺産保存センターが受け入れた。その時点での銭貨は1,036枚を確認している（表10）。

銭貨はすべて中国銭であった。唐、南唐、北宋、南宋、金、元、明の銭貨が含まれている。最も古い銭貨は唐・開元通寶（621年初鋳）、最も新しい銭貨は明・永樂通寶（1408年初鋳）である。北宋銭がもっとも多く735枚で、約70％を占める。次いで明の150枚（洪武通寶78枚、永樂通寶72枚）の約15％、唐の111枚（開元通寶105枚、乾元重寶６枚）の約10％の順である。

2）銭種組成

① 唐～五代十国

唐の銭貨は112枚あった。内訳は開元通寶105枚、乾元重寶６枚、会昌開元通寶１枚（背面“襄”）である。開元通寶は、この一括出土銭では３番目に多く、全体の10.1％を占めている（図12−１～６）。

五代十国の銭貨は２枚あり、南漢の乾亨重寶と南唐の唐國通寶であった（図12−７，８）。

② 北宋・南宋

北宋の銭貨は28種類、735枚を確認した（図12−９～20、図13-21～36）。この一括出土銭の主体をなしており、全体の71.0％を占めている。中でも熙寧元寶113枚、皇宋通寶109枚が多く、元豐通寶93枚、元祐通寶73枚がこれに続く。この傾向はプジョン一括出土銭と同様であり、東アジア全体の一括出土銭の特徴とも一致している。

南宋の銭貨は９種類、16枚あった。南宋初期の建炎通寶から、南宋末期の咸淳元寶まで少数ながら存在している（図13-37～40、図14-41～49）。

③ 元・明

元の銭貨は３枚あった。至元通寶２枚、至大通寶１枚である（図14-51，52）。

明の銭貨は150枚あり、全体の14.5％を占める。内訳は洪武通寶78枚、永樂通寶72枚であった（図14-53，54）。永樂通寶（1408年初鋳）は、この一括出土銭の最新銭である。

④ その他

その他、金の正隆元寶１枚を確認している（図14-50）。また状態が悪く、銭銘が不明なものが17枚あった。

18

3）所見

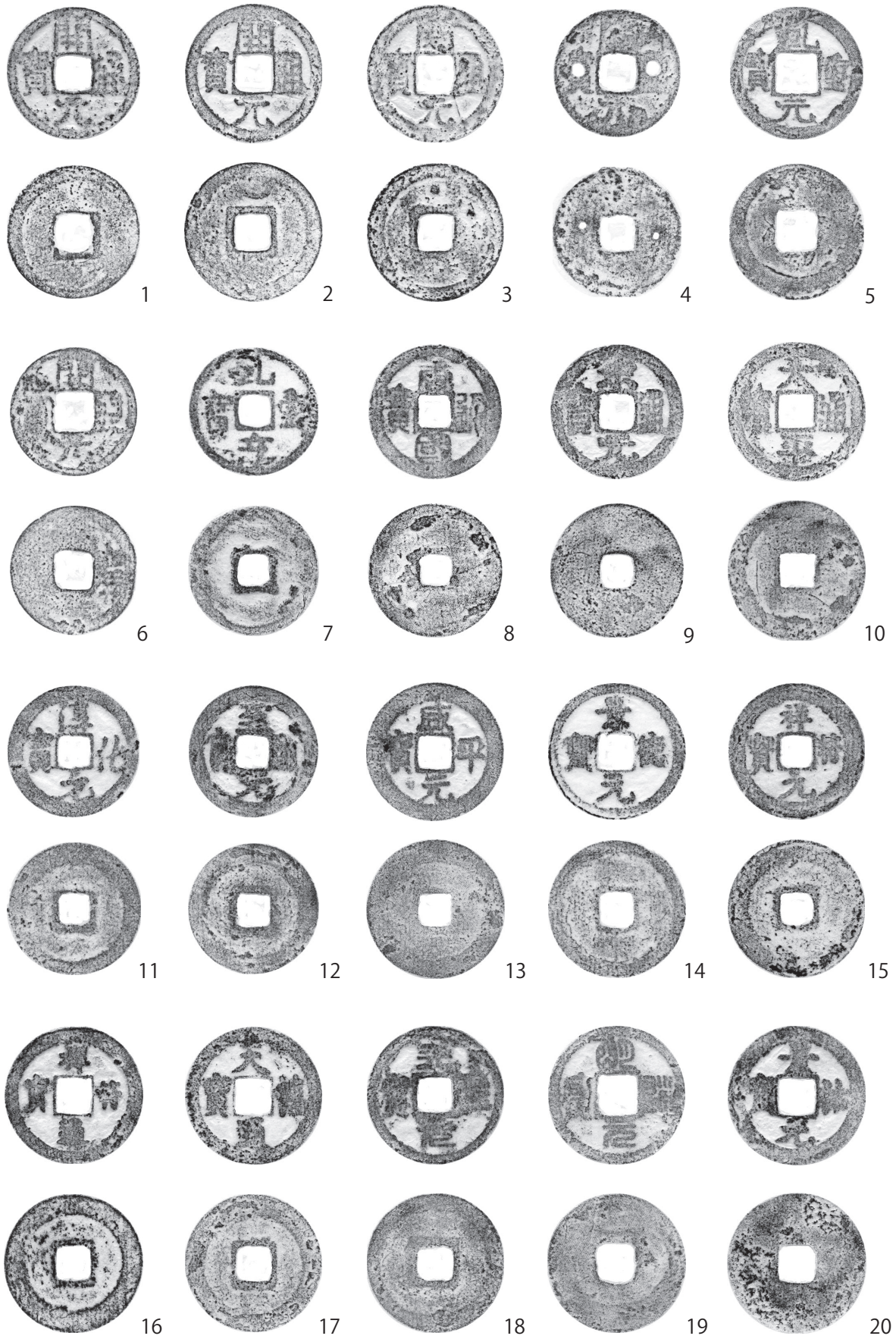
ンガバブ一括出土銭の最新銭は1408年初鋳の明・永樂通寶であった。このことから埋められた時期は15世紀代、おそらく15世紀前半の可能性が高い。中国の明代並行期においてもジャワでは中国銭が流通しており、鄭和の遠征に随行した馬歓の記した『瀛涯勝覧』にも、「取引には中国の銅銭を用いる」とする記述があるという[4)]。ンガバブ一括出土銭は、この記述を裏付けるものと言えよう。

また永樂通寶が72枚と、一定量含まれている点は注目に値する。永樂通寶は中国で出土例はきわめて

表10　ンガバブ一括出土銭集計表

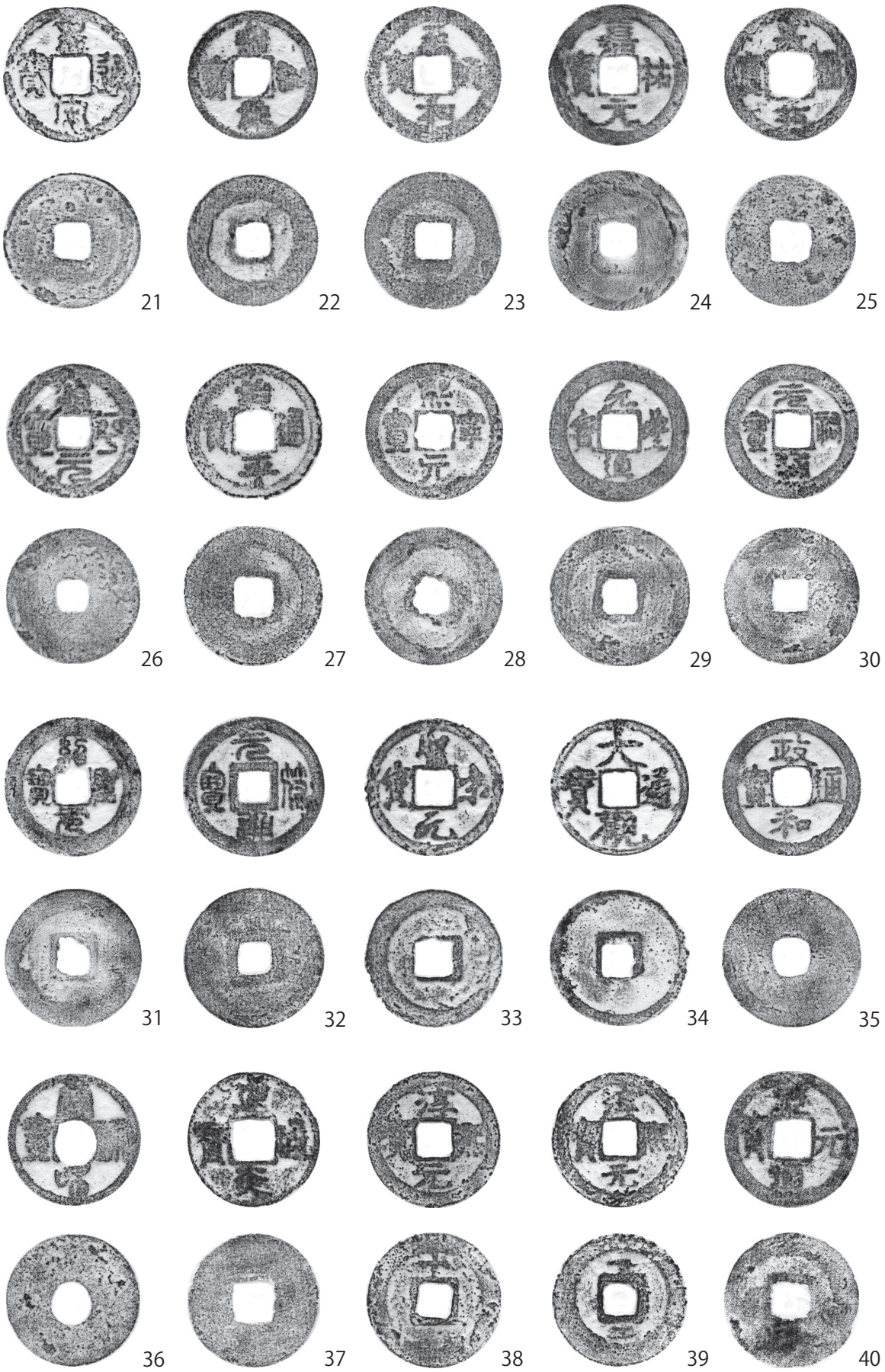
No.	銭貨銘	数量	初鋳年（時期）	王朝	備　　考	図　版
1	開元通寶	105	621	唐	背面“星”1枚、背面“月”9枚	図12-1～4
2	乾元重寶	6	758	唐		図12-5
3	開元通寶	1	845	唐	背面“襄”	図12-6
4	乾亨重寶	1	719	南漢		図12-7
5	唐國通寶	1	958	南唐		図12-8
6	宋通元寶	4	960	北宋		図12-9
7	太平通寶	9	976	北宋		図12-10
8	淳化元寶	5	990	北宋		図12-11
9	至道元寶	8	995	北宋		図12-12
10	咸平元寶	10	998	北宋		図12-13
11	景德元寶	9	1004	北宋		図12-14
12	祥符元寶	22	1008	北宋		図12-15
13	祥符通寶	8	1008	北宋		図12-16
14	天禧通寶	17	1017	北宋		図12-17
15	天聖元寶	47	1023	北宋		図12-18
16	明道元寶	3	1032	北宋		図12-19
17	景祐元寶	12	1034	北宋		図12-20
18	皇宋通寶	109	1039	北宋		図13-21
19	至和元寶	12	1054	北宋		図13-22
20	至和通寶	5	1054	北宋		図13-23
21	嘉祐元寶	7	1056	北宋		図13-24
22	嘉祐通寶	25	1056	北宋		図13-25
23	治平元寶	16	1064	北宋		図13-26
24	治平通寶	3	1064	北宋		図13-27
25	熙寧元寶	113	1068	北宋		図13-28
26	元豐通寶	93	1078	北宋		図13-29
27	元祐通寶	73	1086	北宋		図13-30
28	紹聖元寶	45	1094	北宋		図13-31
29	元符通寶	13	1098	北宋		図13-32
30	聖宋元寶	32	1101	北宋		図13-33
31	大観通寶	7	1107	北宋		図13-34
32	政和通寶	21	1111	北宋		図13-35
33	宣和通寶	7	1119	北宋		図13-36
34	建炎通寶	1	1127	南宋		図13-37
35	淳熙元寶	2	1174	南宋	背面“十”、“十二”あり	図13-38, 39
36	慶元通寶	2	1195	南宋	背面“二”、背面“三”あり	図13-40, 図14-41
37	嘉定元寶	2	1208	南宋	背面“七”、“十一”あり	図14-42,43
38	嘉熙通寶	1	1237	南宋	背面“元”	図14-44
39	淳祐元寶	3	1241	南宋	背面“三”、“十”あり	図14-45, 46
40	皇宋元寶	1	1258	南宋	背面“六”	図14-47
41	景定元寶	3	1261	南宋	背面“二”あり	図14-48
42	咸淳元寶	1	1266	南宋	背面“二”	図14-49
43	正隆元寶	1	1156	金		図14-50
44	至元通寶	2	1264	元		図14-51
45	至大通寶	1	1308	元		図14-52
46	洪武通寶	78	1368	明	背面“一錢”、“福”、“浙”あり	図14-53
47	永樂通寶	72	1408	明		図14-54
48	不明	17				
合計		1036				

19



S=1/1。銭貨の詳細については表10「図版」を参照。

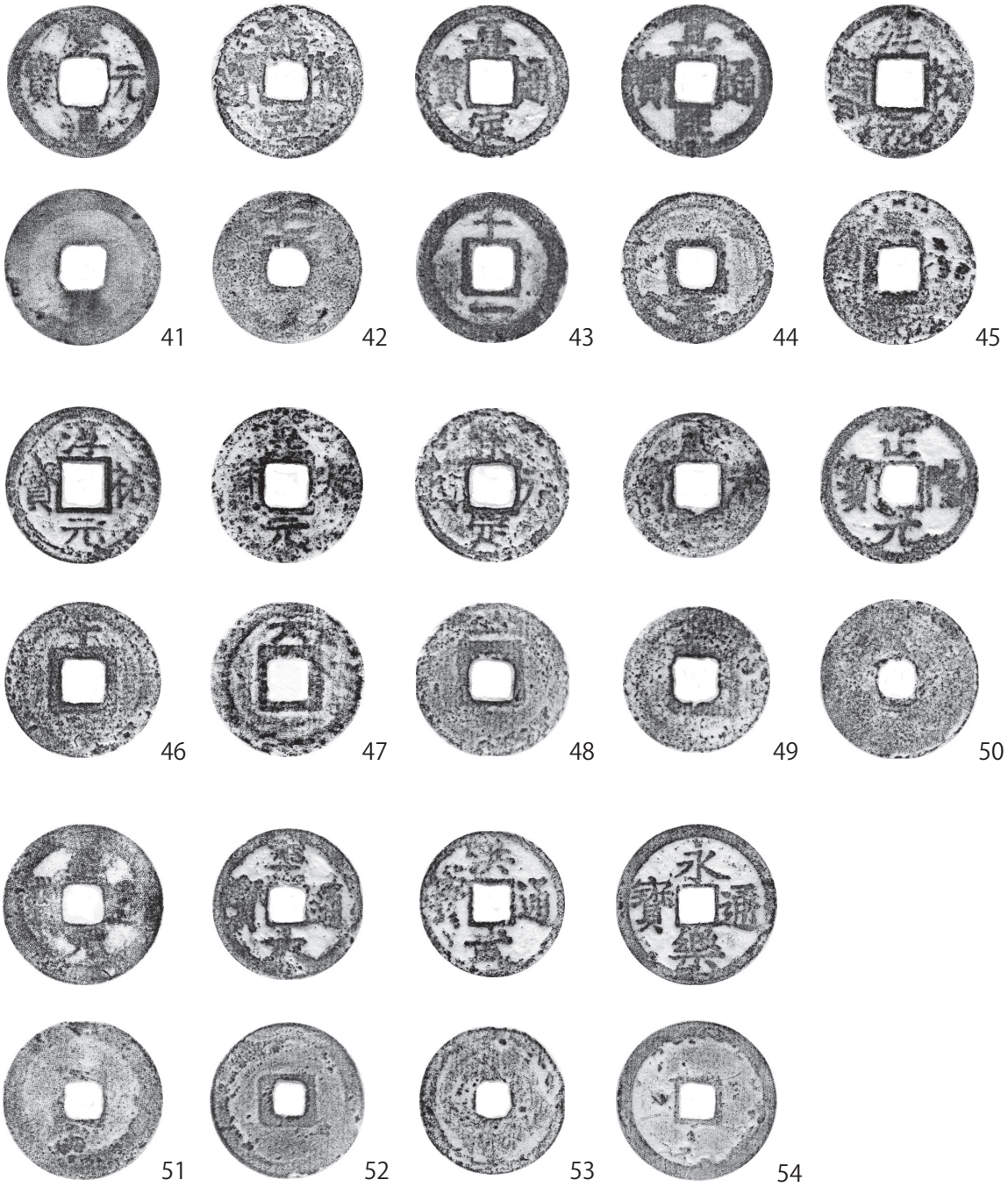
図12　ンガバブー括出土銭（１）



21

S=1/1。銭貨の詳細については表10「図版」を参照。

図13　ンガバブ一括出土銭（２）



S=1/1。銭貨の詳細については表10「図版」を参照。

22

図14　ンガバブ一括出土銭（３）

少なく、中国国内ではほとんど流通していなかったと考えられる[5)]。その一方で、日本やベトナムなど、国外の一括出土銭からは大量に発見され、中国以外の周辺地域で流通していたことが分かっている[6)]。ンガバブ一括出土銭を見る限り、インドネシアにおいても日本やベトナムと共通した状況であったことが分かる。

さらにンガバブ一括出土銭は一文銭のみで構成されていた点も、注目しておく必要があろう。この点はプジョン一括出土銭とも共通している特徴である。さらにこうした「一文銭のみ」が流通する状況は、

日本・ベトナムとも共通するものである。これら中国周辺地域で共通する特徴がみられることは、中国国外において中国銭を用いた貨幣経済を構築する場合、共通したメカニズムが働いていたことを示している[7)]。

4．バリ島クブサルヤ遺跡発見の出土銭

1）概要

バリ島の中央部、バンリ県バトゥール山の外輪山に位置するクブサルヤ村の寺院で、2008年に発見された。寺院の改修中に出土し、数カ所から発見されたものをまとめて収蔵している。過去に複数回行われた祭祀儀礼に使用されたものと推測されている。銭貨表面に布状の繊維が付着しているものもあったことから、一部は布袋などに収められていた可能性がある。

この寺院では、現在も銭貨を使用した祭祀が行われており、この出土銭も本来は1万枚以上発見されていたが[8)]、再利用されたため、我々が確認したのは4,965枚であった（表11）。

表11　クブサルヤ遺跡出土銭集計表

No.	銭貨銘	王朝（鋳造場所）	初鋳年（時期）	枚数	備　　考	図版
1	開元通寶	唐	621	14		
2	宋通元寶	北宋	960	1		
3	至道元寶	北宋	995	3		
4	咸平元寶	北宋	1008	4		
5	景徳元寶	北宋	1004	2		
6	祥符元寶	北宋	1008	1		
7	祥符通寶	北宋	1008	5		
8	天禧通寶	北宋	1017	3		
9	天聖元寶	北宋	1023	9		
10	景祐元寶	北宋	1034	2		
11	皇宋通寶	北宋	1039	11		
12	至和通寶	北宋	1054	1		
13	嘉祐元寶	北宋	1056	5		
14	嘉祐通寶	北宋	1056	1		
15	治平元寶	北宋	1064	7		
16	治平通寶	北宋	1064	1		
17	熙寧元寶	北宋	1068	4		
18	元豐通寶	北宋	1078	22		
19	元祐通寶	北宋	1086	13		
20	紹聖元寶	北宋	1094	10		
21	元符通寶	北宋	1098	1		
22	聖宋元寶	北宋	1101	10		
23	政和通寶	北宋	1111	1		
24	宣和通寶	北宋	1119	1		
25	皇宋元寶	南宋	1253	1	背“六”	
26	洪武通寶	明	1368	6		
27	洪武通寶	明	1368	1	背“一銭”	
28	洪武通寶	明	1368	1	背“工”	
29	永樂通寶	明	1403	4		
30	嘉靖通寶	明	1528	1		
31	萬曆通寶	明	1576	6		
32	崇禎通寶	明	1628	1		

No.	銭貨銘	王朝（鋳造場所）	初鋳年（時期）	枚数	備　　考	図版
33	順治通寶	清	1644	4		
34	康熙通寶	清	1662	166		
35	利用通寶	呉三桂	1673	2	三藩の乱の銭貨	
36	洪化通寶	呉世璠	1678	4	三藩の乱の銭貨	
37	雍正通寶	清	1723	11		
38	乾隆通寶	清	1736	2974		
39	嘉慶通寶	清	1796	518		
40	道光通寶	清	1821	472		
41	咸豊通寶	清	1851	38		
42	同治通寶	清	1862	4		
43	光緒通寶	清	1875	236		
44	不明	清	17-19C	41	清朝銭であるが銭銘不明	
45	景興通寶	黎（ベトナム）	1740	12		図15-1
46	景興巨寶	黎（ベトナム）	1740	2		図15-2
47	景興大寶	黎（ベトナム）	1740	1		図15-3
48	景興泉寶	黎（ベトナム）	1740	1		図15-4
49	光中通寶	阮（ベトナム）	1788	1		図15-5
50	明命通寶	阮（ベトナム）	1820	1		図15-6
51	熙元通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	1		図15-7
52	安法元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	52		図15-8
53	太平聖寶	ベトナム私鋳銭	18C?	6		図15-9
54	祥符元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	3		図15-10
55	聖元通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	38		図15-11
56	元豐通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	20		図15-12
57	治平聖寶	ベトナム私鋳銭	18C?	20		図15-13
58	祥元通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	12		図15-14
59	紹平豊寶	ベトナム私鋳銭	18C?	12		図15-15
60	治平元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	11		図15-16
61	天聖元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	10		図15-17
62	大和通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	6		図15-18
63	祥聖通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	4		図15-19
64	漢元通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	4		図15-20
65	天符元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	4		図16-21
66	元祐通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	3		図16-22
67	咸平元寶	ベトナム私鋳銭	18C?	2		図16-23
68	元符通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	2		図16-24
69	正隆通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	1		図16-25
70	大治通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	1		図16-26
71	紹平聖寶	ベトナム私鋳銭	18C?	1		図16-27
72	天元通寶	ベトナム私鋳銭	18C?	1		図16-28
73	不明	ベトナム私鋳銭	18C?	13		
74	寛永通寶	日本	1636	10	古寛永	図16-29
75	元豊通寶	日本	1660	5	長崎貿易銭	図16-30
76	寛永通寶	日本	1668	6	背“文”	図16-31
77	寛永通寶	日本	1697	42	新寛永	図16-32
78	寛永通寶	日本	1697	3	背“元”	図16-33
79	寛永通寶	日本	1697	1	背“足”	図16-34
80	寛永通寶	日本	1697	1	背“小”	図16-35
81	祥符元寶	インドネシア		8	バリ島の私鋳銭？	図16-36
82	元豊通寶	インドネシア		2	バリ島の私鋳銭？	図16-37
83	不明			19		
合　　計				4965		

24

銭貨は中国のものが多くを占め、4,623枚であった。中でも清朝銭が多く4,464枚で、全体の約90％を占める。中国銭は他に唐・開元通寶14枚、北宋銭118枚、明銭20枚などがあった。この他、日本の寛永通寶63枚、長崎貿易銭（元豊通寶）５枚や、ベトナムの制銭18枚、私鋳銭227枚が含まれていた。さらに現地で中国銭を真似て作られたと考えられる銭貨も10枚確認された。

制銭の最古銭は唐・開元通寶、最新銭は清・光緒通寶であった。光緒通寶は1875年から発行されたため、19世紀までの銭貨が含まれていると考えられる。

また現在賽銭として使用されている、方孔円形の中国銭貨を象ったジャワ文字の銭貨３枚と（図16-38）、無文の銭貨２枚を確認した。調査に参加したデンパサール考古学センターのI. G. M. スアルバワー氏によれば、事前に調査した際にはそれらの銭貨は資料には含まれていなかったとのことであり、きわめて最近混入したものであろう。そのため本資料に伴うものではないと判断し、調査の集計からは除外している。

調査は時間的制約があり、銭貨の種類と枚数のみを確認するにとどまった。種類ごとの詳細な観察、特に清の銭貨の背面に記された鋳造局の情報をすべて確認することができなかったが、乾隆通寶については500枚を任意に抜き出して背面を観察した。また拓本はベトナムの銭貨と日本銭、インドネシアの私鋳銭と思われるもののみ採拓した。

２）銭種組成

① 唐・北宋・南宋

唐の銭貨は開元通寶14枚を確認した。北宋の銭貨は23種類118枚を確認した。元豐通寶（22枚）、元祐通寶（11枚）、皇宋通寶（11枚）、紹聖元寶（10枚）、聖宋元寶（10枚）などが数量の多いものであった。これらは東アジア地域で発見される出土銭でも、大きな割合を占めているもので、大量に鋳造されて流通したものと考えられる。この寺院の出土銭も、その状況を反映したものとなっている。

南宋の銭貨は１枚のみであった。皇宋元寶で、背面が「六」であることから、1258年（宝祐６年）の鋳造であることが分かる。

② 明

明の銭貨は20枚あった。洪武通寶８枚、永樂通寶４枚、嘉靖通寶１枚、萬暦６枚、崇禎通寶１枚である。洪武通寶は背面「一銭」と背面「工」が１枚ずつあった。洪武通寶と永樂通寶は日本やベトナムなど東アジア地域では多く発見されているが、明末の嘉靖通寶、萬暦通寶、崇禎通寶などはあまり多くない。このクブサリヤ遺跡出土銭に萬暦通寶が６枚と一定量ある点は、明の末期以降あるいは清の初めにかけて、中国からインドネシアへ銭貨が流入し続けていたことを示しているのではないだろうか。

25

③ 清

クブサルヤ遺跡出土銭において、清の銭貨は4,470枚と出土銭の主体をなしており、90.0％を占めている。またその中には、清初の三藩の乱の際に鋳造された利用通寶２枚、洪化通寶４枚も含まれている。

清の銭貨の内訳は、順治通寶４枚、康熙通寶166枚、雍正通寶11枚、乾隆通寶2,974枚、嘉慶通寶518枚、道光通寶472枚、咸豊通寶38枚、同治通寶４枚、光緒通寶236枚、清朝銭であるが銭銘不明のもの41枚であった。

清朝銭の中でも乾隆通寶が2,974枚と最も多く、全体の59.9％と半数以上を占めている。調査期間が限られていたため、清の銭貨の背面をすべて調査する時間がなかったが、任意に選び出した乾隆通寶500

枚について、背面の鋳造局を調査した（表12）。15の鋳造局を確認したが、中でも数量が多いのは、京師で発行された戸部寳泉局236枚、工部寳源局98枚、雲南寳雲局92枚の３種類であった。北京の中央政府発行の戸部と工部のものが334枚で約３分の２を占めている。また雲南で鋳造されたものも92枚と３番目に多い。ベトナムなど東南アジアで流通している乾隆通寳は、雲南で鋳造されたものが高い割合を示していることが分かっており[9)]、このクブサルヤ遺跡の事例もこうした東南アジアの様相を反映しているものと思われる。

表12　クブサルヤ遺跡出土乾隆通寳500枚の背面集計表

鋳　造　局	枚数	鋳　造　局	枚数
戸部寳泉局	236	甘粛鞏昌寳鞏局（広東の可能性あり）	6
工部寳源局	98	陝西寳陝局	6
雲南寳雲局	92	江蘇寳蘇局	4
湖北寳武局	12	湖南寳南局	4
広西寳桂局	12	福建寳福局	1
浙江寳浙局	11	貴州寳黔局	1
山西寳晋局	9	無文	1
直隷寳直局	7	総　　計	500

④ ベトナム銭（制銭・私鋳銭）

ベトナムの銭貨は、245枚を確認した。王朝により発行された制銭は18枚あり、黎朝の景興年間の銭貨である景興通寳12枚、景興巨寳１枚、景興大寳１枚、景興泉寳１枚（図15−１～４）、また阮朝の光中通寳１枚（図15−５）、明命通寳１枚（図15−６）であった。

ベトナムの銭貨で注目されるのは、18世紀ころに鋳造されたと考えられている民間鋳造の「私鋳銭」が227枚と、非常に多く含まれていることである。22種類と多くの種類が確認されており、中でも安法元寳52枚、聖元通寳38枚、元豐通寳20枚、治平聖寳20枚などが多くを占めている。

この中には北宋などの銭貨銘の「通」を「聖」に変えた一群があり、菊池百里子氏は15世紀にはこのような私鋳銭が存在したと指摘し、ベトナム中部においては15～16世紀の一括出土銭に多く含まれていることを明らかにしている[10)]。さらに銭銘の「元」が篆書となっていることが特徴の一群もあり、阿部（菊池）百里子氏は18世紀にベトナム南部で鋳造された可能性を指摘している[11)]。

これらベトナムの私鋳銭は、ベトナムとインドネシアとの交易を通じた関係性を物語っているものと考えられよう（図15−７～20、図16−21～28）。

26

⑤ 日本銭

日本の銭貨も、68枚確認された。その内寛永通寳が63枚を占めている。寛永通寳の内訳は、古寛永10枚、背面「文」６枚、新寛永42枚、背面「元」３枚、背面「足」１枚、背面「小」１枚であった。また長崎で対外貿易用に鋳造した「長崎貿易銭」の元豊通寳も５枚確認されている（図16−29～35）。

日本の寛永通寳と長崎貿易銭は中国やベトナムでも発見されており、近世の日本銭は東アジアで広く流通していたことが分かっている[12)]。このクブサルヤ遺跡の出土銭も、こうした東アジアや東南アジアの状況を反映したものであろう。

⑥ その他

その他、クブサルヤ遺跡から出土した銭貨には、現地で私鋳されたと考えられる銭貨がある。その銭貨は中国の銭貨を真似ていると思われ、表面に 4 文字の漢字が配される。しかし、それらの文字は正確な漢字ではなく、おそらく漢字を解さない人物が作ったものと推測される。調査では、北宋の祥符元寳を模したと考えられるもの 8 枚（図 16-36）、元豐通寳を模したと考えられるもの 2 枚（図 16-37）を確認した。

なお、元豊通寳の方は表裏とも元豊通寳の銘文が入れられている。また祥符元寳には、裏面に満洲文字が配されていた。満洲文字も正確ではないが「寳源局」の文字を真似たと思われる。満洲文字を真似ていることは、清以降の時期に作られたものであることを示している。また北宋銭の銭銘の裏に満洲文字を配する点から、この銭貨を鋳造したのは、中国についての知識が浅い人物であることが分かる。こうした点から、おそらく現地で私鋳されたものと考えて良いであろう。

このような中国銭を模した銭貨が私鋳された事実から、寺院に納める賽銭は漢字の書かれた銭貨が必要であったこと、そして必要に応じて現地で似たような銭貨を作る場合があったことが分かる。バリ島で行われる寺院祭祀における、賽銭の条件を知る上で興味深い事例と言える[註3)]。

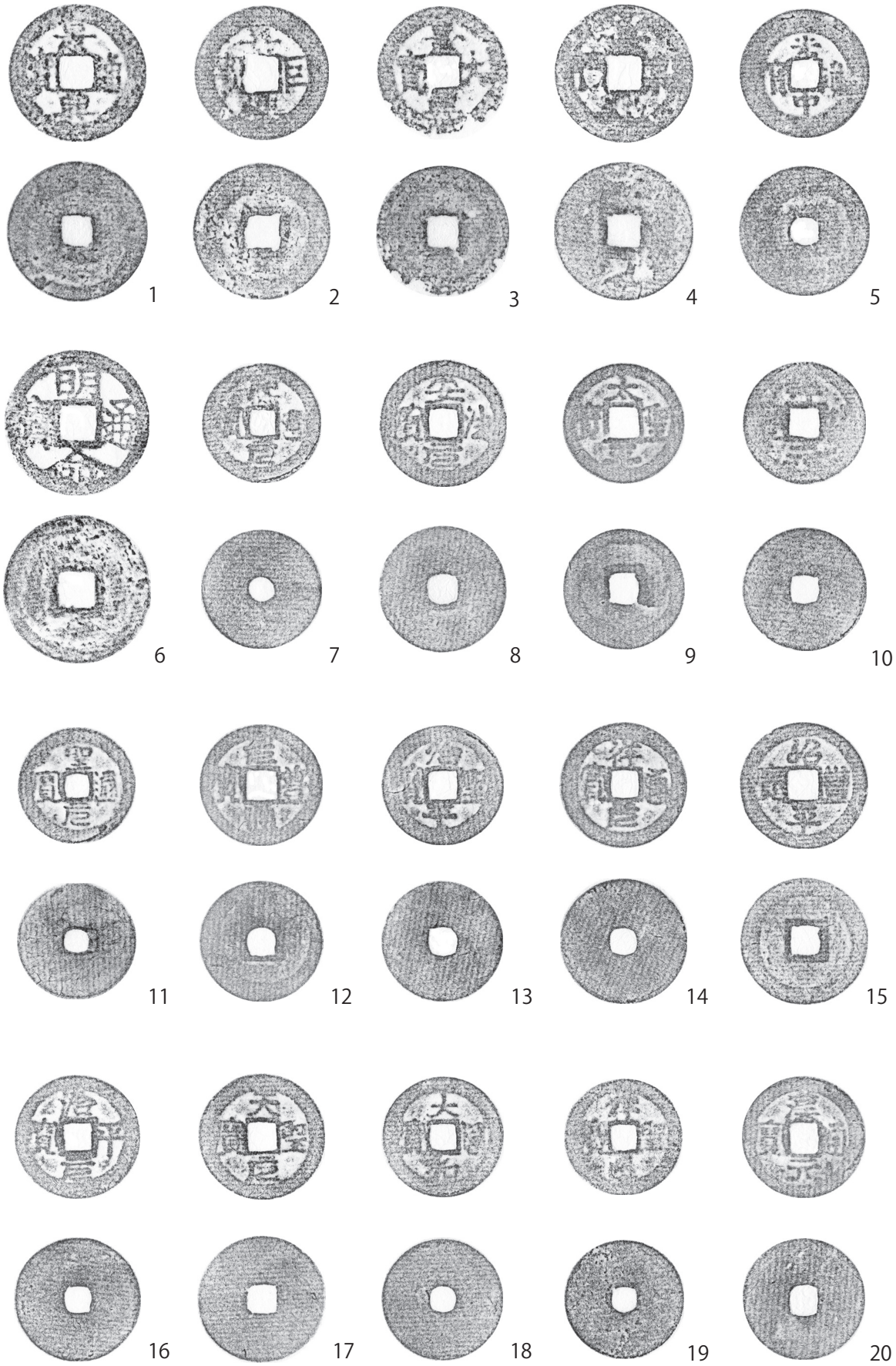
3）所見

クブサルヤ村の寺院から出土した銭貨は祭祀に用いられた賽銭であるが、当時のバリ島でどのような銭貨が流通していたかを知ることのできる、貴重な資料と言えよう。

特に清の銭貨が90％を占めることから、中国との経済活動を通じた関係性をうかがうことができる。同時に、ベトナムの私鋳銭も200枚以上含まれていることも注目される。これらはベトナム南部で政権とは別に、在地勢力によって独自に作られた地域通貨と考えられており、それがインドネシアでも一定量流通していたことは、両者の結びつきを示しているものと言えよう。

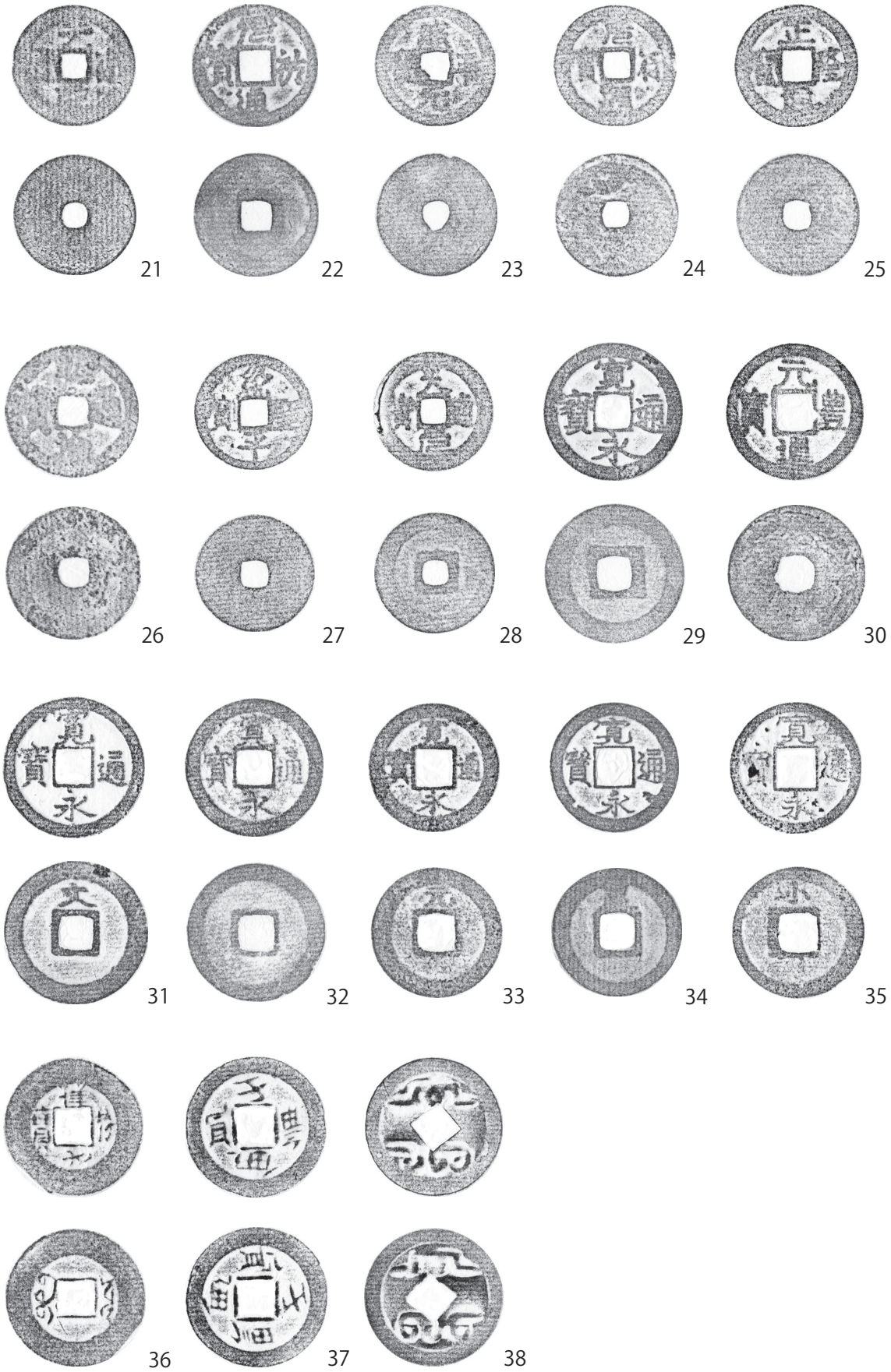
また日本の銭貨も数十枚であるが確認できた。このことは、日本から流出した銭貨が、インドネシアまでもたらされていたことを示している。しかし、これらが直接日本から持ち込まれたかどうかは、慎重に検討する必要があろう。中国では寛永通寳が多数流入し、清朝銭に混じって流通していたことが分かっている[13)]。またベトナムの一括出土銭でも、寛永通寳や長崎貿易銭の元豊通寳が一定量含まれていた[14)]。そのため清の銭貨が主体となっているクブサルヤ遺跡の出土銭では、清国内にて流通していた日本銭が清の銭貨に混じって持ち込まれた可能性も考えられよう。

総じて、クブサルヤ村の寺院で発見された銭貨は、近世の東アジアや東南アジアで流通していた銭貨の実態を反映した資料であり、その具体的様相を知ることができるものと評価できる。またバリ島で行われている祭祀に、銭貨が果たす役割についても多くの示唆を与えるものと言えよう。



S=1/1。銭貨の詳細については表11「図版」を参照。

図15　クブサルヤ遺跡出土銭（１）



29

S=1/1。銭貨の詳細については表11「図版」を参照。

図16　クブサルヤ遺跡出土銭（２）

おわりに

本報告は2011年から2013年にかけて行われた、インドネシアでの出土銭調査の概要報告である。インドネシアでは12世紀以降、中国銭を輸入し流通させていたと言われており[15)]、これまでも出土銭の情報はいくつかの情報が学術雑誌に報告されることがあったが、その詳細は不明であった[16)]。

今回の調査によって、ある程度具体的な様相を知ることができ、いくつかの重要な知見を得ることもできた。特にインドネシアにて中世の一括出土銭が発見されていることは、新しい発見である。また、寺院の賽銭ではあるが、近世の銭貨がまとまって発見され、その具体的な情報を整理できたことは、この時期の東南アジアにおける銭貨流通の状況を分析する上で、貴重な情報と言えよう。

今後は、これら抽出された問題点を、東ユーラシア全体の銭貨流通の中に位置づける分析が求められよう。今回は、その基盤となるデータを報告することを目的とし、所見は最小限にとどめた。これらのデータを用いた詳細な分析と研究は他日を期したい。本報告が当該地域の貨幣考古学研究の一助になれば幸いである。

謝辞

本報告はJSPS科研費JP21520774, JP24520861の助成を受けて行われた調査成果をまとめたものである。さらにJP20H01351の研究の一部も構成している。

またインドネシアの調査においては、国立考古学研究開発センターのソニー W. ウィヴィソノ先生、デンパサール考古学センターのI. G. M. スアルバワー先生、東部ジャワ考古学遺産保存センターのダナン W. ウトモ先生をはじめ、現地の多くの研究者・研究所職員の方々の協力を得た。

そして東南アジア考古学を専門とする坂井隆先生、菊池誠一先生、菊池（阿部）百里子先生には、東南アジアにはまったく不案内な筆者を導いてくださり、多くのお力添えを賜った。

記して感謝したい。

註

註１）科研費による調査研究の一環である。研究課題名などは、下記の通り。
基盤研究（C）「海域アジアにおける出土銭貨の考古学的研究」（課題番号：21520774、研究代表者：三宅俊彦）
基盤研究（C）「東南アジアにおける出土銭貨の考古学的研究」（課題番号：24520861、研究代表者：三宅俊彦）

註２）所属は当時のもの。以下同じ。

註３）調査でバリ島を訪れた際、現在でも寺院および日常で行われる祭祀で、多くの賽銭が使われているのを目撃した。それらは無文ではあるが、形状は方孔円銭を呈しており、中国銭の形状に大きく影響を受けていることが看取された。また現地では鋳造工場も見学できた。そこでも祭祀用に、ジャワ文字を配した方向円銭が鋳造されていた。バリ島では、今も祭祀において、方向円銭が重要な役割を果たしていることが分かる。

30

参考文献

１）青山亨「東ジャワの統一王権」池端雪浦他編『岩波講座　東南アジア史』第２巻（東南アジア古代国家の成立と展開）、岩波書店、2001年、pp.141-167

２）青山亨「シンガサリ=マジャパヒト王国」池端雪浦他編『岩波講座　東南アジア史』第２巻（東南アジア古代国家の成立と展開）、岩波書店、2001年、pp.197-230

3）三宅俊彦「10-15世紀東ユーラシアにおける銭貨流通」『東洋史研究』第77巻第２号、2018年、pp.1-40
4）前掲２）p.226
5）古澤義久「永樂通寶の日本流入に関する一考察」『七隈史学』第23号、2021年、pp.75-92
6）菊池誠一・鈴木弘三編『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究２』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.16 2012、2013年　前掲３）pp.12-14
7）前掲３）p.17-22
8）Badra, I Wayan 2011, Tinggalan Arkeologi di Pura Bukit Legundi Cemeng, Dusun Kubu Salya, Desa Sukawana, Forum Arkeologi, TH. ＸＸⅣ No.1 April 2011, Balai Arkeologi Denpasar, pp.73-82
9）菊池誠一・鈴木弘三編『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要Vol.12 2008、2009年
10）菊池百里子『ベトナム北部における貿易港の考古学的研究―ヴァンドンとフォーヒエンを中心に―』雄山閣、2017年、pp.192, 193
11）阿部（菊池）百里子「ベトナムにおける一括出土銭の最新研究」日本考古学協会編『日本考古学協会第79回総会　研究発表要旨』2013年、pp.148, 149
12）三宅俊彦「清代の銭貨流通」飯島武次編『中華文明の考古学』同成社、2014年、pp.278-293
三宅俊彦「海外で出土した寛永通宝」『考古学ジャーナル』No.738ニューサイエンス社、2020年、pp.9-13
13）前掲12）に同じ。
14）前掲９）に同じ。
15）前掲１）に同じ。
16）インドネシアの出土銭について報告している文献には、次のようなものがある。
岩生成一1966「バリ島の寛永通寶」『鎖国』日本の歴史14　中央公論社pp.438, 439
坂井隆1994「東南アジア出土の銭貨」『出土銭貨』第２号、pp.11-14
坂井隆2012「インドネシアの出土中国系銭」『考古学ジャーナル』No.626 ニューサイエンス社、pp.8-10